



来客御礼 恵陽

illustration 恵陽

通い道だからって あずさ

illustration 東雲一

月の光 太陽の闇 設楽土筆

illustration 色崎

行きゆく人に秋の夕暮れ 梓寝子

illustration damo

無音の響き 「RはドルのR」シリーズ GB(GreenBeetle 改め)

illustration yanagi

舞姫夢幻 ～サヌザと共に～ 冬木洋子

illustration あから

vol.2

あから

はじめに

* オリジナル小説誌 *

新人からベテランまで、ネット小説界で活躍中のみなさんの作品を集めた、オリジナル短編小説誌です。さらりと軽快な作品から技巧が光る読み応えのある作品まで、作家の皆さんが全魂を込めて書き上げた、名作・傑作・快作・秀作の数々をぜひご堪能ください。

* 対象年齢 17 歳以上 *

読者対象として 17 歳以上を想定しております。

対象年齢以下の方の閲覧を禁止するものではありませんが、作品の中には物語の性質上、性愛に関する話題や流血を伴う暴力描写などを含むものもありますので、保護者の方は適切なお指導をお願いいたします。

対象年齢以上であっても、性愛に関する話題や流血を伴う暴力描写が苦手な方は閲覧をご遠慮くださいますようお願いいたします。

* コメント歓迎 *

作品への応援メッセージは作者の励みになります。気に入った作品がございましたら、ぜひコメントをお願いします。

コメントをいただく場合は、どの作品（または表紙絵）へのコメントかわかるように、「作品名（本文 or 表紙）」を明記のうえお願いします。

作品概要

来客御礼 恵陽 / 恵陽ロッカー開けたらそこは異世界。可愛い女の子がお出迎え っってそれはいいけど.....いやいや、よくないっ！

男子高校生異世界召喚物語

通り道だからって あずさ / 東雲一

補習帰り。星空の下、コンビニ菓子を広げてささやかなパーティー。一緒にいるのはキミと、そして.....
コミカルショートショート

月の光 太陽の闇 設楽土筆 / 色崎

薄幸の少女は鏡の向こうにひとつの世界をみる。それは、太陽の王子と闇の娘の物語。
暗黒ファンタジー

行きゆく人に秋の夕暮れ 梓寝子 / damo

薄の土手。風わたる松林。落日に染め上げられた風景の中、そぞろ歩く人。その歩みの先には.....
幽玄ショートショート

無音の響き 「RはリドルのR」シリーズ GB (GreenBeetle 改め) / yanagi

欠けたオルゴール。大切な人へのプレゼントのはずなのに。壊れた？ 壊した？ それとも !?
青春ミステリー

舞姫夢幻 ~ サヌザと共に ~ 冬木洋子 / あから

旅の楽師に不思議な老婆が語る。草原に埋もれた歴史。古の都の最後。若き王と美しき舞姫の悲話
異世界幻想旅行記

ロッカー開けたらそこは異世界。
可愛い女の子がお出迎え♪
ってそれはいいけど……「わいや、よくないっ！」
男子高校生異世界召喚物語

来客御礼



惠陽

illustration

惠陽

この世界では箆笥や机の引き出しが異世界との通路になることもある。嫌な例を挙げれば公衆トイレだって異世界と通じたことがあると聞き及んでいる。

だからきっとこれは不思議なことではないはずだ。そうでなければ、信じられるはずもない。そう、おかしくなどない。

……いや、やっぱ駄目だ。こんな場所に僕がいるなんて、信じたくない。

「あいやー。お客さん、お客さん。頭ダイジョブあるかー」

だけど、無情にもあってはならない声が落ちてくる。しかも似非中国人みたいな口調で。

「頭から落ちたあるなー。こぶが出来てるかもしれないあるよ」

僕は耳を塞いだ。そして目もしっかりと閉じて、視覚情報も遮断する。

これは夢だ。絶対に夢だ。夢に違いない。夢じゃないのなら、アレだ。夢オチだ。

今受けているはずの日本史 品川さんの念仏授業に耐えられなくて途中で寝ちまったんだ。そうに違いない。そして変な夢を見てるに決まっている。そもそも信じられるわけがない。なんでロッカー開けたら教科書がないんだよ。僕の教科書どこ行った？ 辞書もどこに消えた？ ついでに見崎に借りてた漫画は……これは失くしてもいいや。二ヶ月前に借りたものことなんて忘れていだろう。もし問い詰められたら矢立の奴を人身御供に差し出そう。

けど夢にしては妙にリアルな……いやいや夢なんだ。これは夢に違いない。断定だ。

高二にもなってネコ型ロボットのアニメを欠かさず見てるから変な異世界願望が出ちゃうんだ。まあ、あれは異世界じゃなくて未来だけど同じようなものだ。今度から毎週はやめにして、二週に一度見ることにしよう。

頭にこぶが出来てるのもきっと品川さんが眠っている僕にチョークを投げつけたに違いない。目覚めたら頭が白髪になっているのは嫌だけど、寝ていた僕が悪いのだから甘んじて受けよう。授業中はやっぱり起きていなくちゃな。今度から授業中は眠らないようにしよう。

よし。

さあ。

目を開けたら僕は教室に戻っているはずだ。

品川さんの小言だって今日は喜んで拝聴してやる。見崎が人の寝起き姿に爆笑しやがっても、今日だけは寛大な心で許してやる。だから頼むから見慣れた教室であってくれ。

神様仏様貧乏神様、誰でもいいから嘘だと言ってくれ。でも出来るなら貧乏神じゃなくて神様か仏様にお告げをもらいたい。

「お客さん、何してるあるね」

……嘘じゃなかった。

膝から崩れた僕の顔を覗きこむ女の子。

大きな目の中に僕をしっかりと映してくれやがった女の子。

所謂チャイナ服というやつを着ていて、こんな、夢で済ませてやりたい状況でなければ果てしなく歓喜したかもしれない。深いスリットから白い肌が見えていて、じっくり眺める余裕がないのが残念なほどだ。

それにしても僕だって、許容の限界はある。一体何が起きたっていうんだよ。僕が何かしたのか。誓って何もやってない。だから何かやらかしやがったのは絶対にこの女の子だ。

「あ、あんた、が、僕を喚んだのか」

「そうあるよー」

女の子は僕が返事をしたのが嬉しいみたいで、にこーっと笑顔を浮かべる。そんなことで僕は騙されたりしないんだからな。顔が赤くなるのは単純に、その、気温が高いからだ。暑いんだよ、……多分。

「あんた誰だよ。ここはどこだ」

顔を見たらほだされてしまいそうで、視線を逸らしながら訊ねた。いや、僕は色仕掛けに負けるような軟弱者じゃないけどな。

「我は梨花いうある。ここは我のお店ある。ようこそイラシャイマシター」

「り、りいふあ？」

「リーファある、お客さん」

「なんで僕はここに喚ばれたんだよ。早く元の場所に帰してくれ。わけのわからないことに付き合うつもりはないからな。僕だって暇じゃないんだ。もしも魔王退治とか言われても僕じゃ何も出来ないぞ。弱いとかそういうことじゃない。これでも剣道の授業では矢立から一本取ったんだ。……み、見崎には負けたけど、それだって僕の運動能力があいつに劣ってるわけじゃなくて、単にあいつの反射神経が異常なだけで別に僕は弱くないんだか……って、聞けよー！」

顔を見て話していなかったのが悪いのか、リーファは僕から離れて箱を漁っていた。箱というか、箱だけじゃない。やたらものが置いてある。部屋の一角が物置のようになっていて、そこに様々なものがあるようだ。何が入っているのかわからない段ボール箱や、高級そうな木の箱。逆に陳腐な玩具の写真が印刷された箱もある。それらが積み重ねられて今うずたかい塔になっている。リーファが箱の山を漁るたびに肘がその塔に当たって、今にも崩れそうだ。それにしても何の店なのか。

「リー……」

リーファは僕に背中を見せている。深いスリットから白い肌が見えている。余程奥に埋まっている何かを取り出そうとしているのか、リーファの体勢が……。

な、なんか見ちゃいけない気がする。けどこの光景を見逃すのは男として勿体無い気がする。

僕はリーファの後ろ姿をちらっと見た。

「……これは別にやらしい目で見てるわけじゃない。ただ、理由を訊いてるのにリーファが答えないからその答えを待っているだけだ。大体チャイナなんて僕はそんな趣味ないんだから」

「何言ってるあるかー」

「わ！ なんでもないって言ってるだろ！」

リーファが急に僕を振り返った。反射的に叫ぶとリーファは、ならいいあるーとか言ってまた前を向いた。思わずホッと安堵の息を吐いてしまったが、これはリーファが突然話しかけてきたから驚いたんだ。別にやましいことは何もないぞ。うん。

「おー、あったあるー」

もう一度リーファに視線を送ろうとすると、何か目的ものを見つけたようだ。

リーファはやっと僕の前に戻って来た。その手には大事そうに壺を抱えている。そして何故か僕の前にその壺を突き出した。

「さあ、お客さん。この壺を買うある」

「は？」

「この壺買うと幸せくるあるよ。お客さん幸せなりたくないかー」

なんだそのインチキくさい謳い文句は。オチを読んでくださいとばかりの漫画じゃないんだから、それはないだろう。

「今までこの壺買った人、ミナ幸せあるよ。嘘じゃないある。ホントあるよー。だからお客さんも買うよろし」

「え？ だからいきなり壺ってなんだよ」

「買うよろしー」

「ちょおお、壺押し付けないでよ。痛い、痛い、顔痛い」

壺、壺と言いながらリーファは笑顔でそれを押し付けてくる。今まさに僕がその壺で不幸に陥ってんだけど、それで御利益あるって本気で言う気か。というか、顔マジで痛いんだけど。頬骨がミシミシいいそーなんですけど。軋みそうなんですけど。どんだけ強い力で押し付けてんだ。

「リーファ、ちょっと待っ……」

壺を押し返そうとしていると、雷のような激しい音が響いた。何かがリーファの背後に落ちてきたのだ。おかげで壺を押し付ける力が緩んで僕は命の危機を脱した。だけど、落ちてきたのは人じゃなかろうか。

「あいやー。今日は千客万来あるな」

落ちてきたのはやっぱり人だった。頭から落ちたんだろう。後頭部を押さえながら所在無げに周囲を見回している。しかも緑の髪に金の瞳だ。なんて異世界人。やっぱり僕同様何かの拍子にここに落とされてしまったんだ。同志だ。密かに僕は心の中で手を叩いた。

「これもきっとお呪い効果あるね。すごい効き目ある」

「お、おま？」

「お^{まじな}呪い、ある。そっちのお客さん、イラシャイマセー。これ買うよろしよ。このお札ずっとずーっと昔に妖怪を封じ込めたものある。もしもの時に使えば、あらほらさっさー問題解決ある」

お呪いってなんだ、お呪いって。もしかしなくても僕が喚ばれたのはそのせいかな。なんで僕なんだよ。大体お呪いってどんなことやったんだよ。

僕が頭を抱えている間に、リーファは落ちてきた異世界人にお札を突きつけている。どうするんだろうと思って見ていると、男はよくわからないまま懐から金らしきものを渡す。そういえば異世界だとしたら貨幣の種類も違うんじゃないか。買うつもりはないが、もしもこんな所で生活しないといけなくなったら……いやいやいやそれはない。ありえない。

「交渉成立ある。アリガトゴザイマシター」

にっこり微笑んでリーファが男にお札を渡した。男の手にお札が渡ったと思うと、その姿がいきなり消えた。軽いしゃっくりが止まるくらい僕は驚いたが、リーファは何でもない顔でまた僕の方に近寄ってくる。どういうことだ。

「さあ、次はお客さんあるよー」

また壺を手にしたリーファに後じさる。

「ちょ、その前に訊いていい？」

「なにがあるかー」

「お呪いって何？」

「お客さんも興味あるあるかー。これある。我、この雑誌毎週欠かさず読んでるある。そこに書いてあった、試したある」

「見せろ」

僕はやたらキラキラしてる表紙の雑誌をリーファの手から引き抜いた。目次で確認してページを開くと、脱力しそうな文字が躍っていた。

今日は気になってるあの人と両想いになるおまじないを教えちゃうぞ

- 1 まず紙と鉛筆を用意しよう。紙は小さなものでOKだよ！
- 2 紙に好きな人の名前を書こう。間違えないようにね！
- 3 最後にその紙を水の上に浮かべよう！

紙が一分間浮いていたら、あなたと彼は両想い

さあ、さっそく試してみよう！

……この世からすべてのお呪いがなくなればいい。

「うふふーある。効果てきめんなお呪いあるよー」

リーファのここにこ顔が物凄く腹立たしい。

こんな嘘くさいお呪いで僕は喚びだされたというのか。納得いかない。激しく同意しかねるぞ。しかもなんで僕が選ばれたんだ。両想いになれるよ、なんて恋のお呪いなのにおかしいだろ。大体僕の名前をリーファが知っていたとも思えない。

ん？

名前？

もしかして……いやまさかな。そんなこと書いたとは思えない。だがしかし、いやいや待て待て僕、ここは違うということをはっきりさせようじゃないか。

「リーファ、これを試したんだよな」

「そうあるー」

「じゃ、じゃあ、好きな人の名前は誰の名前を書いたんだ」

「紙に書いたことあるかー。あいやー、我好きな人の名前なんて恥ずかしくて書けないあるよ。だから別のを書いたある」

照れ臭そうに前髪をいじりながらリーファが頬を染める。こんな状況でなければかわいいと思ってやるけれど、今は無理だ。

「私の店お客さん少ないある。だから『客』って書いたあるよ」

「……マジか」

「マジあるよー。そしたらお客さん来たある。嬉しいあるー」

無邪気なリーファの笑顔に僕は眩暈がしそう。なんてこった。僕が喚ばれた理由がよーくわかった。こんな激しく馬鹿げてる理由で僕が選ばれたなんて、そりゃ期待なんて微塵もしてなかったけどそこかよ。

「どーしたある。お客さん、具合悪いあるか」

「最悪に決まってるだろ」

僕は頭を抱えて叫ぶ。最悪以外の何物でもない。

「名前じゃん！ 両想いになれるお呪いなんだから、好きな人の名前書けよ！ 僕の名前を書くなー！」

「あいやー」

僕の名前は客。ギャグとか洒落きゃくじゃなくて、客という名字なんだ。からかわれること必至な名字だが、本当にそういう名前なのだから仕方がない。それがこんなところで引っ掛かるなんて誰が思うか。

「お客さん、ホントに客って名前あるか。びっくりある」

こっちはもっとびっくりだ。

「そういえばさっきのお客さんも『キャク』って名前だったあるな」

呑気な言い方に僕は項垂れるしかない。そこで気付いてくれ。

だがつまりは両想いっていうのもそういうことか。リーファはお客が来て、商品を買って行って欲しい。お客の僕は何かものを買えばいい。それで双方一応満足で両想いということなんだろう。だからさっき落ちてきた異世界人はお札を買って元の世界に戻ったのだ。わかりやすいといえばわかりやすい。

僕は溜息を吐いて、不思議そうな顔をしているリーファを見た。

「リーファ、買ってやる」

「ホントあるか」

「ホントあるよ。だけど壺はやめてくれ。出来たら小さくて軽いものがいい」

壺を持って帰るなんて言語道断。というか恥ずかしいから嫌だ。それなら実用的でなくてもいいから邪魔にならないものいいに決まっている。

「だったら、これなんてどうあるか。家外安全、その昔外歩くとたび交通事故にあった偉い人を祀った大変貴重なお守りある」

リーファが自慢げに赤い手の平サイズのミニ巾着を取り出した。というか家内安全じゃないのか。交通安全じゃないのか。交通事故にあった偉い人って誰だよ。そんな人祀ってお守りとしての御利益あるのか。声に出して突っ込みたいが、突っ込んだら負けだ。僕は言葉を飲み込んでリーファに頷く。

「……いくらだ」

「いくらでもいいあるよ。お客さんの世界と同じくらいの値段で買ってくれたら嬉しいあるな」

なるほど、と思ってポケットを探る。が、そういえば財布は鞆の中だ。金がない。シャツの胸ポケットとか叩いてみるが入ってない。あるのは胸ポケットに挿していたボールペンとズボンのポケットに入れていたガムくらいだ。

「……リーファ、これと交換でもいいか」

「何あるかこれは」

「ボールペンといって文字を書くことが出来る道具だ。それからこっちはガムといって食べ物だ。ほら、一つ」

ガムを差し出すとリーファが口を開けた。彼女の口に直接放り込む。もぐもぐと噛んでリーファの顔が輝いていく。僕はその表情にホッとした。

「噛み切れないあるー。変な食べ物あるな。面白いある」

「味がなくなったら包み紙に吐き出して捨てるんだ。食事をした後に噛むと口の中がすっきりする」

「なるほどある。わかったある。お守りと交換するよろし。でもガムだけでいいある。そっちのペンは我も知ってるあるよ」

そう言ってリーファは懐から万年筆を取り出した。何気に僕よりいいものを持っている。

「わかった。まだ開けてないのもあったから、おまけでやるよ」

「ありがとーある」

リーファの手に落とすと喜色満面、頬を染めた。そして僕も手を差し出すと、リーファが心得たとお守りを僕の手の上に載せた。その瞬間、視界がもやに包まれていく。

「アリガトゴザイマシター」

と、リーファの言葉が終わる頃にはすでに視界は真っ暗になっていた。そして闇の中を歩き出そうとした僕は 落ちた。

マンホールの蓋が開いていることに気付かず、落とされたように無重力状態になった。このまま落ちていくのかと思えば今度は何故か頭に強い衝撃を受けた。そのまま尻餅をつく。頭だけじゃない、手を振ろうとしたら壁みたいなものに阻まれる。立ち上がろうと試みたが足も動かすことが出来ない。

体操座りがベストな体勢のようだが、このままいつまでもいられるはずがない。ぎちぎちの体をどうにかしようともがいてみる。手と足で周囲の壁を叩き蹴る。ガゴン、グガン、ベコッと音がする。頑張れば壊せそうだ。手足をばたつかせていると、前方の壁は扉のようなものになっていることに気が付いた。動かせるところは全部使って、僕は体当たりをした。

ガッゴンドン！ ドス！

「客！ 何やってんだ」

廊下に顔を覗かせた品川さんが不思議顔で僕を見ている。僕も不思議で仕方がない。なんで廊下の床に転がってるんだろう。

「もう授業五分しか残ってないぞ。欠席扱いでいいな。後で職員室来ーい」

「……はい」

「うわー、ダッセー、客。髪ぐしゃぐしゃじゃん」

見崎が廊下側の窓から顔を覗かせて、僕を指差した。大声を上げて笑う見崎が怨めしい。

「うるせーぞ、見崎」

真正面には開け放たれた僕のロッカー。中身が廊下に散乱している。

どうやら、本当にロッカーが異世界への通路になっていたらしい。そして考えるに帰ってくる時に小さな空間に閉じ込められてたのは、ロッカーに入っていたということなんだろう。そりゃ体操座りがベストなわけだ。むしろよく入ったと驚きだ。

ともかくも帰ってこれたことにホッとして、僕は埃を叩きながら立ち上がる。すると赤いものが廊下の床に落ちた。リーファから買ったお守りだ。本当の出来事なんだと今更ながらに実感した。どうしたもんかと思っていると、ひらひらと小さな紙が頭上から降ってきた。

『またのお越しをお待ちしております。 万屋店主 楊梨花』

機械的な文字の端に手書きで『また来るよろし』と追記してある。字までは訊かなかったが、リーファの名前はきっとこの字を当ててるのだろう。彼女以外に誰がいるというんだ。

僕はその紙をびりびりと破ると、窓から外に投げ捨てた。

二度と行くものか！

それからこっそり品川さんに怒られて、教室に戻ると見崎と矢立がにやにやしなながら僕を待っていた。その顔に何を訊かれるか予想は出来た。何と答えようかと悩みながら僕は二人の傍まで歩み寄った。

「授業サボるなんて珍しいな」

「そー、そー。急に消えるからびっくりしたよ」

僕だってびっくりしたよ。

そう言ってやりたい衝動に駆られるが言っても意味がない。

「まあ、ちょっとね」

濁して追求を逃れようとする、見崎が首を傾げる。その視線を辿ればズボンのポケットに向かっている。

そういえば、入れたままになっていた。

「何それ？」

「お守り」

引っ張り出すと手の平サイズの赤いミニ巾着。お守りというのは間違っていない。訊かれてもいないのだから何のお守りかは黙っていよう。そもそも家外安全だなんて、僕も説明出来やしない。

「へー」

じーっと僕の手許に視線を固定させた見崎にちょっと居心地が悪くなる。

「いる？」

元々こっちに戻れたらすぐに捨てるつもりだったものだ。しかし幸いにもこんなものを欲しがる奇特的な奴がいるらしい。見崎は何故か物欲しそうな熱視線を寄越してくる。

反応はどんなものだろうかと思っていると、ぱあっと明るくなる表情。

「いいのか」

すごく嬉しそうな顔に少々罪悪感が湧く。だが使ってくれる奴がいるならそっちの方が絶対にいいはずだ。僕は快く手放した。そしてお守りは見崎の手へと渡ることになった。

「……『家外安全』？」

下から覗いた矢立が不審そうに呟くが、見崎は特に気にしていないらしい。何がそんなに惹かれたんだろうか。単純に赤い色がお気に召したのか。それとも形か、物珍しさか。理由はわからない。

見崎はその胡散臭いお守りをしみじみと見つめると、鞆の端に取り付ける。

「どうだ」

褒め称えろと言わんばかりの見崎の表情に、思わず僕は矢立を窺う。すると矢立も僕をちらりと見た。キラキラ目を輝かせている見崎の機嫌を損ねてお守りをつかえされるのは宜しくない。

僕は溜息を吐くと、にっこりと笑ってやった。

「いいんじゃないか」

本気か、と言いたげに矢立が眉を顰めたが、あのお守りを手にした経緯を知れば矢立だって同じことをするはずだ。

そのくらい早急に手放してしまいたいものだったんだ。

「そっか、そっかー。じゃ、本当にもらっちゃうぞ」

「いいよ。僕には必要ないものだ」

いいから気にせずもらってくれ。

そして見崎は嬉々とした表情でその日の残りを過ごしていた。

それから一週間は平和だった。

お守りのことなんてもう頭からすっぱり抜け落ちていた。だから、うん、見崎に渡った八日目にして、僕はやばさを本当の意味で知った。

見崎と矢立と僕と、三人で学校帰りにコンビニへ歩いていた。何の変哲もない帰り道。いつも通っているなだらかな坂を下っていた。頭の中はコンビニで買う予定のピザまんに占拠されていた。他は他愛のない話に使われているだけで、本当にお守りのことを忘れていた。

キュキュキュッと激しい音がして、見崎と矢立が慌てたのに気付いた瞬間、僕の目を奪ったのは派手な赤色で、体が突然軽くなった心地がして、そしてすごく遠くで見崎と矢立の声を聞いた。そう、僕は空中に撥ね飛ばされたのだ。ハンドル操作を誤った車によって。しかも道路側にいたのは見崎のはずで、本来なら僕ではなく見崎が撥ねられるはずなのに。

僕は再び落ちた。

『あいやー。お客さん、また来たあるかー？ イラシャイマセー』

あああ……、お願いだから。後生だから。頼むから。

誰か、誰か夢だと、言ってくれえ。

文・絵：恵陽（けいよう）

http://www.geocities.jp/keiyo_u/top.html

様々なジャンルで書きたいものを書き散らしています。ただしホラーは除く。あと今企画においては絵師としても参戦中。

皆さま、よろしくお願ひ致します。

通り道 だからって

あずさ

illustration

東雲一

補習帰り。星空の下、
コンビニ菓子を広げてささやかなパーティー。
一緒にいるのはキミと、そして……
コミカルショートショート



外はもうすっかり暗かった。ムツとした風が僕らを熱心に誘っている。涼しいコンビニから出てきたものだから、その勧誘はますます強烈に思えてきた。絡みついてしがみついて、何がなんでも離れない。そんな心意気を感じるくらいだ。意地になって振り払うように歩き出した僕がまるで馬鹿みたいに思えてくるほど。

「うーん、解放感！」

その馬鹿さ加減を肯定するかのごとく、隣の彼女は、やけにすっきりした表情で背筋を気持ち良さそうに伸ばしている。

何だかな。あまりにも幸せそうで、僕は思わず毒気を抜かれてしまった。

「ご機嫌だね」

「あたぼーよ」

すでに汗をかき始めているコーラを片手に、彼女はにんまり得意顔。

「嫌な補習がやっと終わったんだもん。嬉しいったらありゃしない」

「補習を受けなきゃいけないことがまずブルーなんだけど」

「暗いぞう少年」

なははは、と笑って彼女はもう一方の手にある袋を振り回す。静かな闇に不似合いな、ガサガサとうるさい音。哀れな袋は勢い余って近くの大きな石とご対面、ガツンと何かがへこんだ音がする。それも一度や二度じゃない。彼女が前へ進むたびにどこかかしかにぶつかって、僕はひっそり中のお菓子たちに同情する。

虫さえこの暑さにへばっているのだろうか。目立つのは冴えた月とボケた彼女の存在ばかりだ。周りにはちらほらギャラリーもいるけれど、僕はあえてそれを無視する。学校でもよくやることだからお手の物だ。話し声や笑い声はBGM。前を忙しく行き来する奴らは、動く木だとも思っておこう。とにかく、そう 見えない、見えない。何も聞こえない。そうやって念じてしまえば、それはいないのと同じだから。

「さ、記念に乾杯」

「何の記念？」

「私たちの再会」

「毎日のように学校で会ってるじゃん。しかも今日なんてやっぱり補習で」

「なはは、悲しきかな出来損ない同士。じゃ、素直に『サラバ補習よまた会う日まで』」

「もう二度と会いたくないです」

「まあまあ。現実を見よう。私たちが次のテストで補習を受けずに済む確率はゾウリムシ以下だ」

「せめてミジンコくらいには進化したいよ」

彼女に「現実を見よう」なんて言われるのは癪だけど、悲しいことにあちらの言い分の方が正しい予感がした。

僕は一つため息を隠す。何度も何度も経験してきたやり取りだから、慣れつつある自分がまた少しだけ悲しかった。

「ささ、補習が終わったことは喜ばしいんだから。パーティをしようじゃないか」

彼女が笑顔でコーラを突き出す。僕も反射的に同じことをしていた。カツン、と冷たい音が鳴く。

パーティ、か。

味気ない、制服という名のドレス・タキシードに、灯りは月と星のシャンデリア。豪華な料理は百円のものばかり集めたコンビニ菓子。オススメは彼女一押しのカード付き板チョコだ。

ああ。

なんて最低で、最高に洒落ているんだろう。

「きっと風物になるねえ」

「訳わからないよ」

「なはは。手厳しいなあ」

何より彼女が隣で、平和ボケしたような笑顔を振りまいてくれるから。

こんなささやかなパーティが、僕は本当は楽しみだ。

ただあえて注文をつけるなら、せっかくのささやかなパーティなんだから、出来ることならやっぱり二人だけで堪能したい。こうもギャラリーが多いと、僕は何だか落ち着かない。

「あ、コーラかけちゃった。ごめんなさい」

ねえ、君は一体誰に話しかけているのかな。

僕は心の中でそっと呟く。別に ヤキモチを焼いているわけじゃない。彼女を独り占めしたいとか、そんな狭い心を持っているつもりはなかった。きっと誰だって、僕と同じ立場になればわかると思う。不意に込み上げてくる、この寒々しい、それでいてねっとりした気持ちをわかってくれると思う。

「ねえ」

「うん？」

「今度から墓場でやるのはやめないかな」

切に言った僕に対し、彼女は相変わらず「なはは」と笑って、コーラをぐいと飲み干した。

文：あずさ

<http://www.geocities.co.jp/Bookend-Hemingway/2282/>

ちっちゃくささやかで密やかなお話を時にはワイワイ、時にはしんみり、時には摩訶不思議に綴っていき
たいと思っています。中でも現代・エセファンタジーがお好き。

twitterID:azusazsuza

絵：東雲一（しののめ・はじめ）

<http://cls.moryou.com/>

東雲と申します。

普段は#twnovel や詩や短編などを書いています。今回は絵師で参加です。

PCで絵を描き始めたばかりで、まだまだ絵をかく技術は拙いのですが、楽しそうな企画なので力いっぱい
良いものにしたいです。よろしくおねがいします。

月の光 太陽の闇

薄幸の少女は
鏡の向こうにひとつの世界をみる。
それは、太陽の王子と闇の娘の物語。

暗黒ファンタジー

設楽土筆

illustration
色崎



0 少女

少女は姿見のある暗い部屋に隠れて、物語の世界を紡ぎだす。

大切にしている、真っ赤な髪の人形と、いつも物語を考えて、遊んでいた。

鏡の中の世界には、男の子と二人の女の子……。

物語の舞台はここではないどこか。登場人物も自分ではない、誰か。ここより、きっと素晴らしい世界。

鏡の中に物語の世界が作られていく。

昔々、ここではない、どこかの国の物語　　。

1 ジェルミ

乳母と侍女たちが大きな声をだして探している。

「王子ー、ジェルミさまー」

ジェルミ王子は体をちぢこまらせて、防虫用である薬草の香りがする衣装部屋に隠れていた。唯一の友人であるリュメールも、一緒に息を殺している。

ジェルミは怒っていた。

隣にうずくまるリュメールも腹を立てていた。

最初に隠れようといいだしたのは、リュメールだった。ジェルミも、それに賛成して隠れているはずなのに、早くも心が折れそうになっていた。

「ねえ、リュヌ、まだ隠れていなければ駄目？」

ジェルミはうまく発音できず、いつの間にかリュメールをリュヌと呼ぶようになった。

「駄目よ、ジェルミは乳母にあんなことをいわれて、簡単に許しちゃうの？」

リュメールの言葉に、ジェルミは押し黙る。

リュメールのことを、幻だ、存在しない、と乳母にいわれた。ジェルミの空想だ、と決めつけられたのだ。

そのことを思いだし、ジェルミは唇を引き結ぶ。

「許さないよ、リュヌはちゃんというもの」

「でしょ？」

ジェルミの返事に、リュメールは満足そうに笑った。

ジェルミはリュメールを見つめた。

暗闇の中でも、彼女の姿ははっきりと見える。友人の姿は、ほのかな月の光を放ち、銀色に輝いている。まるで、幽霊か幻のようだった。

リュメールは、日暮れとともに訪れる。遊んだり話をしたりして、朝、目が覚めるといなくなっている。物心ついた時から、ずっと続いている。

ジェルミが知らないことでも、リュメールなら知っていた。

乳母の恋人のことや、侍女が隠れて食べたお茶菓子のことなど。

そのことをジェルミが乳母に話すと、乳母は一層怖い顔をして、でたらめをいうのは良くない、とジェルミを叱りつけた。更に、リュメールなどいない、ジェルミの嘘だと決めてかかった。

リュメールは幽霊のように見えるが、確かにそこにいるのだ。ジェルミとは違う個性を表している。リュメールが存在しないなどとは、ジェルミには到底思えないのだ。

だから、乳母の意地悪に涙がでた。

隣に立って、一部始終を聞いていたリュメールは、ジェルミを嘘つきといわれて憤った。それで、乳母を懲らしめてやろう、と二人で衣装部屋に隠れたのだった。

このまま見つけられなかったら、乳母は王妃から叱られるだろうし、もっとうまくいけば、辞めさせられるかもしれない。

「でも、そこまでしなくてもいいと思うけど……」

「駄目よ、思い知らせないといけない」

リュメールは小さな頬をぷっくりと膨らませた。そんなリュメールにいつも気後れするが、ジェルミにはいっそ小気味がいい。自分にはできないことを、代わりにしてくれるリュメールが大好きだった。

結局、ジェルミが見つかったのは、翌朝になってからだった。衣装係が、よく眠る王子を抱きかかえて連れてきた。乳母は王妃に叱られたようだったが、辞めさせられなかった。王子が見つかったことが、よほどうれしかったのか、乳母は一日機嫌が良かった。

ジェルミを鏡台のまえに座らせ、その灰色の髪を、乳母がくしで梳き撫でた。

ジェルミは自分の髪の色が好きではない。リュメールの輝くような銀髪にあこがれていた。

鏡に映るジェルミが、深い紺色の瞳で自分を見つめ返している。美しいといわれる容貌。天使のようだ、お母さまにそっくりだ、といわれている。灰色の髪も母親に似た。

ジェルミは母のことをよく知らない。母である王妃は、ジェルミを見るといつも悲しそうにため息を吐く。すぐに気分が悪いといって、宮殿の南翼にある自室に引っ込んでしまう。

父である、太陽の王のことになると、もっとわからない。

ジェルミは、太陽の王に直接会ったことがない。太陽の塔のテラスにでて国民に手を振る姿を、いつも王妃と一緒に貴賓席から眺めるだけだ。

太陽の国にとって、太陽の王は神そのもの。だから、王妃や王子とともに過ごさないのは当然だった。また、太陽の塔からでてこなくても不思議はないと思われている。

太陽の王のことは、肖像画や立像で知ることができた。その姿は、金色の仮面をつけた金髪の人物だった。城のあちこちに飾られている金色の立像を指して、これが自分の父であり、神でもある太陽の王なのだと教えられた。

ジェルミが自分の髪のことを気にすると、年老いた家臣から、太陽の王になれば髪は自然と金色になるのだ、といわれた。一寸の狂いもなく、肖像画や立像と同じ姿になるのだ、と諭された。

いずれ、ジェルミ自身が太陽の王になる。それは、何ともいえない期待感と、ひとではなくなるという不安感をもたらした。

ジェルミは最高の教育を受けさせられ、未来の太陽の王になる責任を、臣下たちから求められた。昼のあいだ、教鞭を振るう教師や、模擬剣を繰り出す教師からあらゆることを教わった。日が沈むと、やっとリュメールがやってくる。彼女はジェルミの剣を手にして、鮮やかに振り回した。「男の子はいいわね。剣を持たせてもらえるもの。すてきだわ」「でも、ぼくは苦手だ。好きじゃない」「きっこうやって暴れても怒られないでしょ」リュメールが模擬剣を乱暴に振り回すのを見て、ジェルミは慌てて止めた。「やめて、やめてよ！ 乳母がやってくるじゃないか。ものが壊れたりしたら、叱られてしまうよ」リュメールは剣をおくと、にやにやと笑った。「あら、王子さまがそんなことくらいで慌てては駄目じゃない。太陽の王みたいになれないわよ」ジェルミはバツが悪くなる。「太陽の王に会いにいってみようか？」ジェルミの気持ちを読み取ったのが、リュメールが言いだした。それを聞いたとたん、ジェルミの心は騒ぎだす。怖いような、うれしいような、そんな感情がないまぜになり、胸が高鳴る。しかし、太陽の王に会う勇気がなかった。「無理だよ、会えるわけがないよ」「やってみないと、わからないわよ？」

0 少女

少女はキッチンで食べものをあさっていた。音を立てないようにして、流しや調理台の下にある引きだしの中を調べた。朝の五時。パパもママも眠っている。流しの下には、ママのお酒の瓶がぎっしり詰め込まれていた。瓶を一本一本だして、缶詰めがないか探してみる。少女の努力は徒労に終わり、嘆息して瓶をもとに戻していく。瓶がぶつかってカチリと音がするたびに、心臓が止まりそうになった。少しでも音を立てたら、ママがやってくるだろう。パパまで起きてきたら、立てなくなるくらい殴られるかもしれない。胸の動悸が静まるのを待って、少女は再び瓶をしまっていた。ここに缶詰めはなかった。今度は引きだしを開けていく。以前、高いところの扉を開けて食べものを探していたら、誤ってシリアルを箱を落としてしまった。その音を聞きつけたママがやってきて、さんざん平手打ちをされたばかりか、結局御飯を食べさせてもらえなかった。だから、今度は失敗しないように、低い場所だけを探すことにしたのだ。

幾つか引きだしを開けていき、やっと、クールミントの口臭消しを見つけた。

昨日の朝から水しか飲んでない。口臭消しのタブレットでも、少女にとって唯一の食べものだった。

スカートのポケットに、さっとタブレットの容器を押し込んだ。

食べものは、ママが機嫌のいい時にもらえる。それ以外で食べものを口にしているのを見られたら、きっとママは激しく怒るだろう。

こっそり隠れて食べなくてはいけなかった。

少女は人形を胸に抱いて、ママが納戸と呼んでいる、姿見のある部屋に入った。

タンスや使わないソファのあいだに潜り込み、じっと聞き耳を立てる。

まだ誰も起きだしてこないようだ。

ポケットから容器を取り出した。白いタブレットが透明の容器の中に数粒ある。

ふたを開けて手のひらにタブレットを載せた。

爽やかなクールミントの香りが漂う。

少女は、一瞬戸惑った。

これを食べたらママにばれてしまわないか、と。

何も食べていない胃袋が、少女の恐れを無視して鳴りだした。

急激な空腹に我慢できなくなり、手のひらのタブレットを口の中に放り込んだ。

清涼感のある香気が鼻を抜けていく。

ミントの刺激で唾液が溢れてくる。

あめ玉のように、少女は夢中でタブレットをしゃぶった。

何ておいしいんだろう、とため息を吐いた。

タブレットを二粒だけなめたあと、少女は容器をソファの陰に隠して、のそのそと隙間から這いだした。

姿見のまえに、人形と一緒に座り、鏡の中を覗き込む。

たちまち、少女の目のまえに物語の世界が広がりだす。

物語の世界はまだ完璧ではなかった。

少女はここで少し考えた。

男の子のママは、お酒を飲まない代わりに、男の子に興味がないことにしよう。たたいたり、怒鳴ったりもしないけれど、あんまり優しくない。

男の子には昼のパパがいることにしよう。

昼のパパは、いつもどこかへ行って、男の子のそばにはいない。

少女のパパもそうだ。昼間は仕事でいつもいない。たまに少女を連れて外にでることがあると、気持ち悪いくらい優しかった。昼間のパパに会うひとは、必ずパパを尊敬した。夜の時と余りにも違うので、少女は時折、パパが二人いるのではないかと本気で疑うほどだった。

だから、昼のパパがいるのなら、夜のパパもいるだろうと考えた。

二人の女の子たちには、夜のパパがいる。

夜のパパは、少女のパパのように怪物なのだ。

真っ黒くて、大きくて、酒臭くて、乱暴。

昼間のパパと違って、少女がしてほしくないことをする。

きっと、夜のパパは黒いマントを身につけていて、真っ黒くて顔もわからない。多分、夜のパパは闇の世界の王なのだ。

横暴で、いやなことばかりする。もしかすると、男の子の国や、闇の国の住人にも、いやなことをしているかもしれない。

女の子たちにも、少女と同じいやなことをしているかもしれない。

きっと、そうだ。

少女はたちまち闇の王のことが嫌いになった。

二人の女の子も、闇の王のことが嫌いだらう。

男の子はどうだらう。

男の子は闇の王のことをよく知らないから、お化けのように恐ろしがるかもしれない。

真っ暗な闇を嫌うように、忌むだらう。

2 ジェルミ

乳母や侍女、^{たいまつ}松明を持って見回りをする騎士たちの目を盗んで、ジェルミとリュメールは東翼の回廊を渡り、庭園にでた。

リュメールは迷うことなく、ジェルミが暮らしている宮殿の東翼から、太陽の塔へと向かって走っていく。

太陽の塔は宮殿の北側にそびえている。しかし、ジェルミは太陽の塔への正確な道順を知らない。暗闇の中で銀色に光るリュメールを頼りに、ジェルミはその後ろをついていった。

塔の周囲には松明が点っている。金色に塗られた門扉は、固く閉じられている。

二人は見回りの騎士の目から隠れて、茂みの中にうずくまった。地面を這いながら、松明の明かりに照らされた塔まで近づいていく。

ようやく二人は塔のもとまでやってきた。見上げると、随分高いところに閉じられた窓がある。地面から丈夫そうな蔦が生えていて、壁を伝い、窓まで伸びている。

リュメールがためらうことなく、子供の腕ほどもある蔦に手をかけた。網目のように茂った蔦をぐいと引くが、びくともしない。

「登れそう」

リュメールの命知らずな言葉に、ジェルミは気後れした。頭上に小さく見える窓を眺めて、背筋が凍る。

「無理だ……」

思わず涙声になった。

「弱虫」

リュメールにばかにされ、仕方なくジェルミも彼女のあとに続いた。ジェルミが蔦にすぎると、引き絞った弓のような音がした。一瞬慌てるが、どんどん登っていくリュメールを見て、ジェルミは急いであとを追った。

ジェルミが足をかけるたびにきしむ蔦、よじ登るたびに揺さぶられる葉。ようやく窓にすぎりついた時、はるか下方から悲鳴が上がった。

「ジェルミさま！」

乳母や侍女が口々に降りてくるように、叫んでいる。

「見つかった」

残念そうにリュメールがつぶやいた。二人で窓を覗くが、部屋の中は真っ暗で何も見えない。

「太陽の王、いないのかな」

ジェルミもがっかりした。そう感じた瞬間、それまで覚えなかった恐怖が、足先からじわじわと這いあがってきた。

「降りよう」

リュメールはそういい、するすると鳶を伝い降りていく。

けれど、ジェルミの足はすくみ上がり、全く体がいうことを聞かない。

こわごわ下を窺うと、心配そうなひとびとが、おもちゃのように小さく見える。その小ささにまた震えがくる。

「降りられない……」

ジェルミの言葉に、リュメールは呆れかえって手を差し出した。いつの間にか、リュメールの体は空中に浮かんでいた。

「ほら、手を握って」

「でも、落ちてしまうよ」

「大丈夫だって。わたしがついてるから」

ジェルミはためらいつつも、リュメールの手を取った。

「飛んで！」

リュメールのひと声とともに、ジェルミは目をつぶり、鳶を離すと、空中に身を躍らせた。

足元から沸き起こる悲鳴。

足先に感じる確かな固い感触。

体を包む^{あんど}安堵のため息。

乳母がジェルミに抱きつき、泣いていた。

「何て、何てやんちゃな王子でしょう」

乳母はそういい、何度もジェルミの背中や髪を撫でつけた。

リュメールはジェルミの手を離し、満足そうにいった。

「ほらね、大丈夫だったでしょ」

ジェルミには何が起こったかわからなかったが、あの高さからジェルミは飛び降り、無事に着地したらしい。

「ねえ。ぼくの手を握っていた女の子を見たでしょう？」

しかし、乳母は不思議そうな顔をして、否定した。

ジェルミと手をつないでいたリュメールの姿を、誰も見なかったといわれた。幼いジェルミには、リュメールの姿が他人に見えないことが、どうしても納得がいかなかった。

ジェルミが少しずつ大きくなるにつれ、リュメールも成長した。髪が伸び、背が高く線の細い少女になった。

その頃になると、ジェルミはリュメールに対して疑問が湧いてきた。

「リュヌは、なぜ他人には見えないの？」

「じゃあ、反対に聞くけど、どうして他人に見えないといけないの？ わたしはジェルミの友人。ほかのひとの友人じゃない。ジェルミにだけ見えていれば、何の問題もないの。それよりそういうことが気になること自体、わたしにとって不思議だわ！」

反対にリュメールにそういわれ、ジェルミは困った。自分の疑問を強く彼女に問いただせなくなってしまう。

リュメールの気の強さが苛立たしくもあり、うらやましくもあった。それはジェルミにないものだったから。

何をするにせよ、リュメールの主導がなければ、ジェルミにはやる気が起こらなかった。失敗した時に、乳母に皮肉をいわれるのがいやだった。それに、最も尊敬する父親、太陽の王に呆れられることを考えると怖くなるのだ。そのため、自分でもできそうなことならばやってもいいけれど、誰もしたことがない難しいことに挑戦する自信が、ジェルミにはなかった。

ジェルミの自信のなさを、リュメールはいつもからかった。城の外にでようとか、馬に乗ることを覚えようとか、果ては闇の森にいこう、と誘うのだった。

闇の森。

太陽の国の人間なら、誰もその言葉を聞くと、震えあがる。闇の森には、闇の王がすまうといわれている。

太陽の王が神なら、闇の王は悪魔だった。闇のように黒く、ありとあらゆる災いを呼ぶ。いや、呪いをかけるのだろうか。

若者をさらい、森にある闇の城で血祭りに上げるとか、病や不幸はすべて、闇の王がもたらすものだと、国民は信じている。

ジェルミもそういった噂を信じて、闇の森や闇の王を怖がった。

それをリュメールは笑うのだ。

「ジェルミはなぜ闇の王が怖いのか？ 闇の王が悪魔だから？ でも、みんなのまえにでてきたことなんて、ないじゃない」

「リュヌ、あのひとは人間をさらうらしいよ。闇の城に連れていかれて、戻ってきた人間はいないんだって聞いたよ」

「おばかさん、本当かどうかもわからないのに、信じるなんて。わたしと一緒にそれが本当かどうか確かめましょうよ」

「無理だよ、ぼくにはできないよ……」

「闇の王なんて怖くないって思えないの？ 王子なのに？ 未来の太陽の王なのに？ 闇の王を怖がる太陽の王になるつもりなの？ 本当にジェルミは弱虫ね」

弱虫でいい、余計なことをして大人を怒らせたくない、ましてや、太陽の王にとがめられたくない、とジェルミは思った。

「いいんだ、ぼくは弱虫で」

ジェルミが小さな声でいうのを聞いて、リュメールは呆れたように肩をすくめた。

リュメール

太陽の国の北方に広がる闇の森には、闇の王の城がある。

城は黒い石を積まれて作られたように見える。いびつなアリ塚のようなでこぼこした外観が、城の外壁

に刻み込まれており、不気味な様相を呈^{てい}している。

黒水晶細工の城の内部には、暗い影がたくさんある。そこには目に見えない悪霊や醜い魔物がすみついている。

リュメールと赤い髪のエトゥワールは、赤子の頃から城で暮らしている。

二人を育てたのは目に見えない侍女たちや、小さな魔物。

彼らを支配するのは闇の王だった。

闇の王の名前は、オプスキュラという。

リュメールとエトゥワールは、闇の王の名前を知っている。小さな魔物たちから教えてもらったのだ。

オプスキュラは、魔物たちの言葉を借りるならば、闇そのもの。歩くあとから泥のような闇がこぼれる。

肌は漆黒、その顔も仮面に隠れ、拝むことすらできず、汚くいやしい魔物たちを足蹴^{あしげ}にする。

そんな恐ろしく乱暴なオプスキュラが、エトゥワールの将来の夫なのだった。

太陽が昇ると、闇の城は寝静まる。エトゥワールも、寝台にまるまって寝入ってしまう。リュメールは籠の中でおとなしくしている。小鳥でいる昼間は、エトゥワールのそばにいる。

夜になって、ひとの姿に変身したリュメールは、籠から抜けだすと、城内の回廊や部屋を通り、庭へ飛びでた。

梢から漏れる月明かりが、灰色に沈む庭に差し込んでくる。それは白い炎のように地面から揺らめき立つ。

リュメールはその白い光を踏みしだいて飛び跳ねた。

少女は芝生の上に寝転がる。

寝転がって辺りを見回すと、白い石の乙女たちが、リュメールを心配そうに見下ろしているように感じる。

闇の城の庭には白い石でできた噴水と、アラバスタ細工の美しい乙女たちの像が飾られている。像の瞳に感情はないが、もとは生きていたのだということが窺える。

なぜそんな像が飾られているのか、リュメールは知らない。恐らくエトゥワールも知らないだろう。生まれた時からここにあり、これからもここにたたずみ続ける魂のない像。

なぜ乙女たちが生気をなくして、硬い石となり果てたのか、リュメールにはわからなかった。

エトゥワール

エトゥワールは、早くも枯れ果てた老女のように、夢も希望も持っていない。

鬱屈とした憤りを胸に秘めていた。

夜はたった一人きり。そばに小鳥がついているが、夜になるといなくなってしまうため、遊び相手は醜く愚かな魔物だけだった。

夜に点される緑色の明かりが、黒水晶の壁面に添えつけられたカンテラから漏れる。

緑色に照らされた黒水晶の城で、エトゥワールの燃え立つ髪は、唯一の明るい色彩だった。

夜がきて、リュメールがジェルミのもとにいてしまうと、エトゥワールが目覚めます。

エトゥワールとともに城も目覚め、暗闇にわだかまる小さな魔物たちも蠢きだす。

(エトゥワールがおきたよ)

(おきたおきた)

小さな魔物たちが、暗闇に白眼だけを光らせて囁き合う。

起きぬけのエトゥワールは機嫌が悪い。とてもいい夢を見ていたような気がするのに、無理に現実を引き戻されてしまったような……。

エトゥワールが手招くと、目には見えない侍女たちが彼女の世話をする。黒のドレスを持ってきて着せてくれたり、髪を梳かしたり。そのたびに真っ赤な髪から稲妻のような静電気が起こる。青白い光がエトゥワールの体にまとわりつく。まるで彼女も幽鬼のようにほのかに光りだす。

エトゥワールには、何かを忘れてきてしまったような不安感がいつもある。それが何だか思いだせないから苛立っている。

少し機嫌がいい時は魔物と遊ぶ。小さな魔物のキイキイ声を聞きながら、魔物で人形遊びをする。気に入らなければ、魔物を壁に投げつける。ぐしゃりと音がして、魔物はぐんにやりと横たわるが、それを気に留めたこともない。魔物は死なないとわかっているから、心配などしない。

エトゥワールにとって、ここは退屈な遊び場だった。

そのうち彼女たちも次第に成長し、髪は腰に届くほど長くなった。体は丸みを帯び、昔と違ってオプスキュラに畏怖と嫌悪を感じるようになった。

オプスキュラは、エトゥワールのもとに、毎夜訪れるようになった。エトゥワールは怯えた。少女は闇の王に捕まるまいと、夜がくるたびに城の中を逃げた。エトゥワールは悪霊や魔物に見張られていて、城の外にはでられないのだ。

オプスキュラは漆黒の闇とともにやってくる。月が隠れた暗闇の、更なる影を縫って、音もなく忍び寄り、エトゥワールの首筋に背後からくちづけをする。

エトゥワールの首筋は総毛立つ。氷が首に当てられたように凍える。闇の王のくちづけや指先は、無遠慮にエトゥワールの体をすべっていく。息が凍りつく。

エトゥワールの肌には、きめ細やかな紋様がある。それはすべてオプスキュラに愛撫された部分。次第に全身が紋様に埋め尽くされていく。

自分が自分でないものになっていく恐怖。絶望。不安。

エトゥワールは恐怖と絶望に駆られて、声なき悲鳴を上げる。しかし、何の助けもない。それでも、命の枯れる思いで絶叫する。

エトゥワールは震え、這いながら、リュメールを探し、鳥籠を抱く。いつしか涙はでなくなった。とうに涸れたようだ。彼女は籠の中の小鳥だった。オプスキュラに囚われている。

エトゥワールの怒りは、諦めと悲しみにすり替わっていった。

リュメールも不安をいつも抱いていた。彼女は、エトゥワールよりもいろいろなことを知っている。自由を味わってしまった。怒りこそないにしても、いつか自分もエトゥワールもいなくなってしまうような不安があった。その不安は、庭にたたずむ乙女たちの像を見ている時の気分に似ている。足元の安定していない場所に立っているような、いつ足場が壊れてもおかしくない不安。そんな不安がふいにやってきて、リュメールを苛む。

そんな時、リュメールはジェルミにすがりたかった。幼い時から共にいる人間。何度となく、闇の城に誘ったけれど、恐れていこうともしてくれなかったけれど。

エトゥワールは次第に自暴自棄になっていった。闇の森に迷い込む人間と戯れるようになった。飽きると魔物に下げ渡し、何の感慨もなさげに、その人間の最期を見届けた。

リュメールにとって、それはむごいことだった。血に汚れるのを嫌った彼女は籠から逃げだし、中庭に潜むようになった。

そのことで、エトゥワールは更に荒れるようになってしまった。

0 少女

「おい、こっちにこい」

夜がやってきて、パパという名前の怪物が、少女の寝室に入ってきた。

少女は部屋の扉を開ける音で目を覚まし、パパから隠れるように部屋の隅に駆け寄り、ちごこまる。

パパは少女を暗闇の中に引きずり込んで、いやなことをする。

誰かに助けを請いたいけど誰もいない。ママは酒臭い息をして、ソファで眠りこけている。

少女がどんなに泣いても助けてはくれない。

しかも、泣いたらもっと痛い目に遭わされてしまう。だから、人形を必死に握り締めて、こらえるのだ。

そうすれば、泥水のようにゆっくりとだが、いやなことは流れ去り、パパもいなくなる。

パパがどこかへいなくなれば、やっと少女は解放される。

パパにいやなことをされた夜は鏡の部屋にいき、物語を紡ぐ。二人の女の子と男の子の物語を……。

少女にとって、彼らは次第に親しみのある人物になってきた。

エトゥワールだって部屋に鍵をかけられれば、少女と同じいやな思いから逃げられるのに。

ジェルミが弱虫なのは、いろんなことが怖くて仕方ないからだとか。

少女もリュメールのように自由にどこかへ行ってしまえたら……。

そんなことを何時間も夢見た。

彼らとともにいるような安心した気持ちになって、少女は眠りに落ちた。

突然

ママの怒鳴る声で少女は目を覚ました。

食器を洗ってないとか、掃除をしてない、洗濯をしてないといって、ママが怒っている。

少女は飛び起きると、姿見の部屋から駆けだして、ママのところへいく。

しかし、怒鳴られてしまうということは、間に合わなかった証拠だった。

不機嫌になったママが機嫌を直すことはない。少女はさんざんたたかれたあと、涙を我慢しながら、いつけられた仕事をこなしていった。

少女は仕事をしつつ、空想にふけて、心を慰めた。

3 ジェルミ

「もう、わたし、ここにこられないわ」

リュメールがそう言ったのは、ジェルミが成人する儀式の前日だった。

「なぜ？」

ジェルミは驚いて訊ねる。

「あなたが大人になってしまったから。わたしも、もう大人になるから」

「大人になると、なぜ、こなくなるの？」

「子供みたいなことをいって、困らせても駄目。こないんじゃないくて、わたしはきたくても、きつこられないから」

ジェルミは明日で成人を迎える。その日にジェルミは儀式を行う。太陽の国の国旗をつけた矢を放ち、その矢が落ちた国の姫を妻に迎えねばならない。

「妃がきたら会いにこられないの？」

「違うわ」

「じゃあ、会いに行く」

「とても怖いところにいるのよ、弱虫なくせに会いにこられるの？」

リュメールはいつものように意地悪い。けれど、優しい笑顔で、ジェルミを見つめる。

「さようなら、弱虫さん」

儀式の当日、ジェルミは正装して、物見の塔に上っていった。

太陽の塔に比べればはるかに低いけど、それでも十分な高さを誇る塔である。

ジェルミが手にした矢と国旗は真新しい。矢は白木。国旗は繁栄の白、血統の赤、そして婚姻の色である青の三色。リボン状になった国旗を羽根の部分に結わえている。

ジェルミは頂上で、やじり 鏃が かぶら 鏃になっている矢をぎりぎり弓弦につがえると、天に向かって放った。

矢は高い音色を響かせながら、雲間に消えていった。

矢がなぜ離れた国に落ちるのか、誰にもわからない。

太陽の王の力だというものもある。中には、闇の王が関係しているのではと勘ぐるものもある。ひねくれたものなどは、王子が最初から用意していたのさ、といい放った。

飛んでいった矢は、いままで、必ず三つの国のいずれかで見つかったのだ。

北には闇の森。

西の国には美しい姫。

東の国には英知ある姫。

南の国には歌楽の巧みな姫。

闇の森以外の国は、太陽の国に忠誠を誓っていた。

矢が落ちた国の姫は、意思とは関係なく、太陽の国の王子と結婚しなければならない。

そうすることで、その国は太陽の国の恩恵を受けられることになっている。

妃になる姫は、その国旗と矢を持って、王子とともに太陽の国を訪れることになっている。

それほど時間のかかることではない、と年を取った家臣が、以前ジェルミに教えてくれた。必ず矢は見つかるのだ、と。ジェルミの父王は、それは簡単に矢を見つけてみせた。妃になる姫を連れて、国に戻ってきた。だから、ジェルミもそれほど苦労することはないだろう。家臣は決めつけるようにいった。

それを聞いて、ジェルミは成人の儀式のことを、単純な試練だと侮っていた。連れていく従者も一人だけにした。矢を放ったその日のうちに、ジェルミは意気揚々と国を旅立った。

リュメールがもうこないなど、ジェルミには信じられなかった。当然、夜になればいつも通りやってくるものと思っていた。

焚き火のそばに寝転がり、夜空を眺める。炎の明かりで星は見えずらく、月の光も乏しい。

宿のある土地を訪ねている日は、寝台で眠ることができた。けれど、いつもとは限らない。今晚のように野宿になることが多かった。

ジェルミは自分が従者から侮られていることに気付いていた。夜になると目に見えないものと話す王子のことを、ほかの人間が何と知っているのか、ジェルミは知っている。知った上で、ジェルミはリュメールを待った。

別れの言葉の通り、リュメールは訪れなかった。

一人の夜がさびしかった。初めて過ごす孤独。どれほどリュメールの存在が大きかったのか、会えなくなってしまってから気付いた。

リュメールは友であり、姉であり、妹でもあった。唯一、ジェルミのさびしさを埋めることのできる存在だった。

恋をしているのとは違う。家族を失ったような思いだった。

胸のうちが苦しく、切なく、えぐれていくようだった。

悶々とした様子を、従者に見られなくなかった。

ジェルミは従者に背を向け、まるくなって眠りについた。

0 少女

少女は、物語の登場人物たちと同じように成長した。

部屋に鍵をつけて、パパから身を守ることができるようになった。

泥酔して怒鳴り散らすママのことを無視できるようになった。

女らしく髪を長く伸ばし、化粧をした。その化粧も周囲を威嚇するように派手だった。

胸の内側にわだかまる怒りやさびしさを、少女は表にだすようになった。しかし、決してそれは両親ではなく、自分や友人たちに向けられた。

おとなしかった少女は乱暴になった。怯えていた幼い頃は、物陰でひっそりといろんなことが過ぎ去るのを見守るだけだったが、成長した少女はその怯えを怒りや衝動に変えた。

悪い仲間に入り、窃盗やものを壊したり、けんかをしたりするようになると、いつの間にか鏡の部屋にも隠れなくなった。心の慰めであった物語も紡がなくなった。あれほど大事にしていた、赤い髪の人形も放っておかれて、埃をかぶっている。

空想の男の子も女の子たちも不幸になればいい、と思うようになっていた。

少女にとって空想は逃げ場だったはずだ。けれど、空想の中の女の子も男の子も苦しみだした。逃げ場ではなくなった空想は、ただつらいだけだったのだ。だから、そんなものなどに頼る自分を嘲り笑い、必要ないのだと思うようになった。

少女は家に帰らず、派手で露出の多い挑発的な格好をして、仲間の少年たちと連れ立ち、遊び歩いた。

そうやって家に寄りつかなければ、パパやママに会わずにすんだ。

学校にもいかに仲間たちといることで、苛立つ気持ちを紛らわすことができた。

そのうち、一人の少年が気になるようになった。少年は悪い仲間の一人だった。

悪ぶった格好に似合わず、少年は純朴に見えた。エレキギターをかき鳴らしながら、いつか大成してやると意気込んでいる。少女のからかいに照れたりして、ほかの少年たちとどこかしら、違っているような気がした。

ギターを弾く、歌のうまい少年に少女は恋をした。

いつもそばに座り、彼の話に耳を傾けた。少女は彼が大スターになると疑わなかった。たとえ、少年がコンテストにでたりバンドを組んだりしなくても、その夢と一緒に見ることで、少女も楽しい気分になることができた。

少年と少女は次第に仲良くなっていき、自然と体を重ねるようになった。

少年との行為を少女は聖なることのように感じた。

汚くて価値のない自分が、少しでも美しくて意味あるもの、必要とされるもののように感じる事ができた。

その行為が多ければ多いほど、少女は自分が清められていくと信じた。

4 ジェルミ

ジェルミは従者を連れ、放たれた矢を求めて東から西、南へと渡り歩いた。しかし、矢は一向に見つからなかった。

残るは闇の森となった時、従者が城に戻ろうといいだした。

しかし、矢の所在もわからないまま戻るわけにはいかない。

それに、ジェルミはリュメールのことを思いだした。

もし、闇の森に行くことを恐れて引き返した、と彼女が知ったら、きっとまた呆れられるだろう。

あの時は弱虫でいいと思ったが、いまは自分のことを侮っている従者も共にいる。従者にまでばかにされるのはいやだ、とジェルミは思った。

「王子、矢はいずれ見つかります。今回は城に戻り、姫が矢を持って名乗りだすのを待ちましょう」

従者は卑屈な顔をしていった。その顔には王子への侮蔑とへつらいが込められている。

ジェルミは強がって行ってしまった。

「何も持たずに戻るわけにはいかない。戻りたいなら、おまえだけ先に帰ればいい」

「それはいけません。王子のお世話をするのが仕事ですから」

やがて、二人は森の裾についた。ジェルミは馬から下りる。

闇の森の黒々とした樹木が、強固な鎧のように見える。森の入り口に生える木々の密度が高く、馬を乗り入れることは難しく思えた。

ジェルミは唾を飲み、足を踏みだす。

「王子、呪われた森に入るのは……」

従者が怯えた声を上げた。

「ぼくは怖くない。おまえはついてこなくていい」

ジェルミは一人で黒い闇の森に入っていった。

一步踏み込んだとたん、太陽の光が閉ざされた。

日差しは分厚い梢に遮られ、冬のように冷え冷えとした空気が横たわっている。

森は、夜のように薄暗い。

森の木々の枝は、ジェルミの背後を緑のカーテンで隠していく。

木の根っこがはびこり、それに足が取られる。奇妙な形にねじくれて伸びる枝。いく手を遮るように縦横に生える蔦。それらをよけながら、ジェルミは盲目的にまえに進んだ。

どれほどの時間を歩いたかもわからない。同じ場所をぐるぐると廻っている錯覚に陥る。

空腹を感じ、更に不安になる。馬に積んだ食料をおいてきてしまったのだ。

後悔しても遅い。どこからやってきたのかさえ、わからないのだから。

疲れで視界がぶれだした時……。

(あいつ、だれだ)

(えものだよ)

(エトゥワールさまのえもの)

くすくすという笑い声が、低木の茂みから聞こえ始める。しわがれた、野卑な声。それは一様にキイキイと甲高い。茂みはどう見てもジェルミの腰より低い。一体何が潜んでいるのか、ジェルミは気味悪く思った。

そんなジェルミの思いを無視して、甲高い声は後ろをついてくる。

(どうする)

(どうしようか)

(エトゥワールさまにもっていくか)

(そうしようか)

声はジェルミのことなど気にせず話し込んでいる。

ジェルミは立ち止まった。とうとう好奇心に負けてしまった。

エトゥワールとは誰だろう、闇の森に人間がすんでいるのだろうか……？ とジェルミは思った。

生まれて初めて一人になって、他人が恋しくなったのかもしれない。

「そこにいるのは、誰だ？」

ジェルミは恐る恐る声をかけた。

(きづいたぞ)

(いまごろか)

(おろかものだ)

(でもわかい)

(うつくしい)

(こっちにこい)

(こいこい)

(ついてこい)

(エトゥワールさまにおあいしろ)

声はひいひいと笑いながら、葉陰を揺らして遠ざかっていった。エトゥワールという人間の居場所に案内するつもりのようなようだった。

声は少し進んでは待つ、ということを繰り返す。

ジェルミにとって、その声だけが頼りだった。

ジェルミは必死で、茂みの中から聞こえてくる声を追いかけた。

声を追いかけていくうちに、とても広い空き地にでた。ひらけた木々の梢から、暮れなずむ空が覗く。そこから差し込む夕日の茜色が木々の葉を染め上げている。その枝葉の向こうに真っ黒い城がそびえていた。

城の外壁はごつごつとした黒水晶に覆われている。でこぼことした装飾は、不可解な薄気味悪さを感じさせる。まるで巨大なアリ塚に、尖塔を何本も立てたようだ。

城を囲むように作られた庭には、白い石膏の噴水とアラバスタ細工の乙女たちの像がある。

生気を感じられない庭と城をジェルミは見つめ、立ち尽くしていた。

薄暮の森の裾で、小鳥が鳴いている。小鳥は噴水の縁に留まり、首をかしげてジェルミを見ている。

ジェルミが小鳥に近づこうとした時、城の正面にある扉のひらく、重たい音が響いた。ジェルミは小鳥のことを忘れ、扉へ向かった。

黒い骨を組み合わせたような扉が、大きな口を開けてジェルミを待っていた。

扉の奥には、点々と等間隔に緑の淡い灯火が並んでいる。淡い灯火が届かない場所には暗い闇がわだかまっている。

ジェルミはためらう。

ここがあの闇の城なのか。幼い頃にリュメールに誘われたが、怖くていくことすらできなかった。それがいまになって、妃探しのために訪れることになるろうとは、皮肉だった。

こんな時にリュメールが隣にいれば、恐れるものなどないように思えた。

(おやかたさまがおまちだ……)

(エトウワールさまがおまちだ……)

(わかいおとこをまちこがれている……)

またあのしわがれた笑い声が、城の奥から聞こえてくる。

ジェルミの胸が、再び好奇心にうずいた。エトウワールという人物が、お館さまといわれているのだろうか。一体、どんなひとなのだろうか。

とうとう好奇心が恐怖に勝った。

ジェルミはしわがれた声に導かれ、城の奥へと進んでいった。

幾つも扉を越え、天井の高いドームを通り抜ける。緑色に照らされた長い廊下を過ぎていく。緑色の灯火に、黄色いろうそくの光が混じり始めた。

気付くと、ほかの場所とは雰囲気の違いの違う部屋に立っていた。

見上げると、天井には煙水晶のシャンデリアが垂れ下がり、そこから黄色い灯火が揺れている。

石の床には、黒い毛皮が敷き詰められている。ジェルミは視線を徐々に奥へと移した。

奥まったところに黒い^{しゅうず}縹子のカーテンが下がっており、その中に誰かが横たわっている。

女の白い足先がカーテンの隙間からでており、生気のない肌をさらしている。

「ようこそ、闇の城へ」

カーテンの奥から聞こえた声は、うら若いものだった。恐らくジェルミと変わらない年頃ではないだろうか。

衣擦れの音とともに、黒い縹子のカーテンがひらかれて、奥から黒い絹のドレスを纏った女が現れた。その顔は黒縹子の陰になり、はっきりと窺うことができない。

幾つもの黒いビロードのクッションにうずもれ、横たわっている。黒縹子から燃えるような赤い髪が垂れて見えている。

ジェルミは、心を奪われたように赤い髪を見つめていた。

「こちらへ」

ふいに片手で招かれる。ジェルミは魔法にかけられたように女に近づいた。

傍らのクッションに座るように促され、ジェルミは素直に腰を下ろした。

黒縹子がさらさらと揺れ、真っ白な女の顔が現れた。赤い髪がしどけなく女の顔を覆い、その目は黄褐色で、猫の瞳のように気まぐれに動く。唇はしっとり濡れて紅く、官能的に笑みを造っている。

女はどことなくリュメールに似ていたが、ジェルミは気付かなかった。余りにもその印象が違いすぎたためだ。一目で女に心を奪われたジェルミには、女がリュメールと似ていることがわからなかったのだ。

彼女は、夜に咲く赤いバラ、闇に妖しく煌めくルビー、夜空に輝く紅い星。

ジェルミは言葉が尽きると、今度は唇と指先の愛撫で、エトウワールの素晴らしさを讃えた。

滑らかな白い肌に、紫色の紋様が浮かんでいる。紋様は、豊かな両乳房を脇からすくうように取り巻いている。そのまま、なだらかな凹凸を這うように紋様は伸びていき、足先まで取り巻いていた。

ジェルミはエトウワールのそばに横たわり、美しいと思う場所すべてにくちづけていった。

エトウワールは、ジェルミが思った通り、若い女であった。だが、彼女は若々しくはつらつとしていない。気怠い雰囲気を醸している。彼女が何もかもにうんざりしているように、ジェルミには思えた。

彼女は余りしゃべらない。声を立てて楽しそうに笑わない。恋い焦がれるジェルミに、想いを告げてくれない。

ジェルミは、エトゥワールに何度も愛していると告げた。鹿のような、しなやかでたくましい四肢を絡ませながら、何度も何度も息吹をほとばしらせて、愛の言葉を囁いた。

しかし、彼女は冷笑するだけ。

共に太陽の国にいこうといっても、彼女は何も答えない。何度もしつこく問うて、やっとエトゥワールは冷たい瞳でジェルミを睨んだ。

「おまえは愚かものだ。ここがどこか忘れている。ここは闇の城。そして、わらわは闇の王の許嫁。そこまでわかっていながら、なおもわからぬふりをする。おまえはどうしようもない愚かものだ」

「エトゥワール、君はまだ闇の王と結婚していないじゃないか」

その言葉に、エトゥワールは冷たい視線を向ける。

「ここでぼくと幾夜も過ごしたが、現に闇の王はやってこない。君が本当に許嫁だという証拠があるのか」

「わらわがここにすんでいることが証拠だ」

「ぼくのことを嫌いだから、ついてきてくれないのか？ ぼくのことを好きじゃないのか？」

エトゥワールは何かをいいかけたが、ジェルミから視線を外すと、部屋の暗い一角を見つめた。深いため息を吐き、口を閉ざしてしまった。

ジェルミにとって、矢は、エトゥワールを連れだす、格好のいいわけだった。まるで、矢があればエトゥワールが自分を愛し始めてくれるように勘違いした。

「矢があれば……、君を妃として連れていけるのに……。闇の王から君を奪う口実になるのに……」

エトゥワールのあからさまな拒絶をまえに、ジェルミは同じ言葉を繰り返すしかなかった。

物陰からしわがれた話し声が聞こえてくる。

(ばかだ、おろかものだ)

(おつむがからっぽだ)

(やみのおうはずっといる)

(みてるぞ、ぜんぶしてる)

(おやかたさまも、そろそろこいつにあきてくるころだ)

(そうだ、あきてくる……)

エトゥワールとのことを、闇の王は知っている。二人の行為を隠れて見ている。もしかすると、いまもこの部屋にいるかもしれない。そんなことを考えて、ジェルミは怖気を感じた。

二人で寝台に寝そべっていると、窓の外から小鳥の鳴き声がした。鳴き声が聞こえるとともに、エトゥワールは怒りっぽくなって、魔物やジェルミに当たり散らした。

閉口したジェルミは、寝台から抜けだした。

衣服の上からガウンをはおり、庭に向かった。

いつしか、廊下を抜け、中庭を臨む回廊にでた。中庭は緋色に染まっている。ぼんやりとたたずんでいると、徐々に周りが紫色に塗り替えられる。

薄暮の中庭に、小鳥が舞い降りた。

ジェルミは夢うつつの気持ちで、その光景を見ていた。

小鳥は乙女たちの像のあいだを飛び跳ねた。小鳥は膨れ上がり、少女の姿になった。ぼんやりとした幽鬼の姿。その少女がエトゥワールにうり二つなのに気付く。

ジェルミは驚きを隠せず、ただ見つめている。少女が踊りをやめた時、ジェルミは少女に近づいた。

「リュヌ」

幽鬼のような少女は、友人のリュメールに間違いなかった。

リュメールは、ジェルミに気づき、さびしげにほほえんだ。

「久しぶりね」

次々と、ジェルミの口を疑問が突いてでる。

「なぜ、君がここにいるんだ」

「ここがわたしのいる場所だから。そんなことより、この城からお逃げなさい。でないと、あなたもいまに血祭りにされるわよ」

リュメールの物騒な発言にジェルミは驚いた。

「どういうこと？」

「エトゥワールは男に飽きると、魔物に慰みものとして下げ渡して、八つ裂きにするのが趣味なの」

ジェルミはガウンをぎゅっとかき抱き、青い顔をしていった。

「まさか……」

「いままで、例外はなかったの。それに、闇の王の許嫁でもある。ただではすまないわよ」

「どうしよう？」

「逃げるしかないわ。いますぐに」

「でも、でも、ぼくは彼女を愛してる。この森で矢さえ見つければ、ぼくは彼女を連れていけるんじゃないかな」

「矢もないのに何をいってるの？」

「リュヌは矢のある場所を知らないの？ 矢があったら、彼女もぼくについてきてくれるんじゃないかと思うんだ。矢がないから、彼女はぼくに思いを告げられないのかもしれない」

「何をばかなことをいってるの？ あの子は矢があろうとなかろうと、誰も愛さないわ。良心がないのだから誰も愛せないのよ」

「それなら、どうしたらいいの？」

「あの子の良心でも探すしかないわね……」

エトゥワールには良心がないと聞かされ、ジェルミは納得した。あの冷たさはそうとしか説明ができない。

「良心を見つけたら、エトゥワールはぼくについてきてくれるかしら？」

「いつまでも何をいってるの、おばかさん。横恋慕はやめて、さっさとお逃げなさい」

リュメールはジェルミの言葉を一蹴した。

ジェルミはリュメールに追い立てられ、森に入ってしまった。

リュメール

森にジェルミを追い込んだあと、リュメールは考えた。

城は相変わらず、暗く、よそよそしい雰囲気だ。闇の王の手下である魔物たちが、暗闇からいつでも様子を窺っている。

(おや、リュメールだ)

(ことりちゃんがきたよ)

(めずらしいもんだ)

口々にさえずり合っているのをしり目に、ずんずんとエトゥワールの寝所へと進む。

エトゥワールは寝台でうたた寝をしている。彼女に闇がねっとりと覆いかぶさり、蠢いている。闇の遠慮ない愛撫にエトゥワールはうなされている。

リュメールは、エトゥワールから目を反らした。

リュメールこそが、エトゥワールの良心なのだ。寝台で悲痛な声を上げているのは、自分自身なのだ。苦痛と絶望は、すべてエトゥワールが引き受けているのだ。

寝所の片隅に目をやる。

エトゥワールの寝所の奥には、魔物たちの吹きだまりがある。そこには魔物たちが拾い集めたガラクタが、山のように積み上げられているのだ。

リュメールはそこに寄っていき、声をかけた。

「おまえたち、この森で三色の国旗のついた矢を見なかった？」

(みたよ)

(みたみた)

魔物たちの答えに、リュメールは意気込んだ。

「どこで見た？」

(ここじゃないどこか)

(ひひひひ)

ふざけるように嗤う、しわがれた声。

リュメールは苛立ち、低い声で脅す。

「ふざけたことをいってると、エトゥワールにいいつけるよ」

とたんに、魔物たちはしおらしくなった。

(うそだよ、いいつけないでおくれ)

(しってる、そうだ、いちばんたかい、きのこずえにあった)

(あさひにさらされる、つきのひかりにてらされるから、わしらはこわい)

(いきたくない)

「そう、じゃあ、まだ誰も取りにいったないのね」

(いったない、いったない)

リュメールは、ほっとした。

きびすを返し、急いで寝所をでた。

リュメールは、矢を三つの国のいずれかに持っていこうと決めていた。

国旗と矢をエトゥワールに渡そうとは思わない。エトゥワールがジェルミの花嫁となったとしても、闇の王の婚姻が取り消されるわけもなく、逃げられるわけでもない。

いまのジェルミでは、闇の王から彼女を助けだせるはずがない。

弱虫な王子はかわいらしい姫と一緒にあって、幸せに暮らすのが一番なのだ。

リュメールは中庭を抜けて、ふわりと飛んだ。幻の体が大気の流れに乗り、徐々に浮き上がっていく。樹

木の梢につま先立ちして跳めると、はるかかなたに抜きんでて高い木が見つかった。

リュメールは木のでっぺんにつま先をかけ、ぴょんぴょんと跳ね飛んで、目的の杉のもとへとやってきた。

杉は、枝を左右に伸ばし、尖った針のような葉を怒らせて、まるでリュメールに敵意を向けているように見える。その杉のでっぺんに、白と赤と青の三色の国旗を結わえた矢が引っ掛かっていた。

リュメールはそれを拾い上げると、手に携え、ここから一番遠い国を目指した。

0 少女

少女が少年のアパートメントに転がり込んで、数か月が経とうとしていた。

少女と暮らすようになると、少年はつまらない理由で仕事を辞めた。すごい曲を作って、くだらない大人たちを見返してやる、と少年はうそぶいた。しかし、毎日、ギターを弾いているか、酒を飲んでいるかのどちらかだった。

少女は、自分の収入だけでは生活できないことに気付いた。しかし、少年は理解してくれず、仕事の話になると不機嫌になった。

業を煮やした少女は、強い語調で少年に頼んでみた。

「ねえ、仕事してよ。あたしだけじゃ、稼ぎが足りないから」

それを聞いた少年は、不機嫌そうな顔をして少女を無視すると、部屋をでていった。少年は一週間帰ってこなかった。

少女は悔やんだ。仕事をしてくれなどと、二度といわないことにした。

ふらりと帰ってきた少年は相変わらずだったが、少女が昼夜問わず働くことで、少年を養った。

少年はでかけたきり、次第に帰らなくなってきた。

少女とよくつるむ仲間たちは、少女が浮気されている、と告げてきた。

少女はそんな言葉など聞こえないふりをした。

ある時、二週間も連続で勤務が続いた。少女は夜中にへとへとになって帰ってきた。

寝室に入ると、少年と見知らぬ女がベッドで絡み合っているのを、目の当たりにしてしまった。

「誰、そいつ！」

少女は少年に詰め寄った。

「うるさいな、誰だっていいだろ」

少年はうるさがり、少女の頬を打った。

少年の傍らの女は、それをにやつきながら見ている。

「にやにやしてんじゃねえ！」

少女は頭にきて、女の髪をひつつかんだ。

「ばか！ やめろ」

少年は女をかばい、少女を足で蹴った。

少女は床に転んだ。少年の傍らにるのが、既に少女ではないことを悟った。悔しさに目のまえが涙でにじむ。少女は少年と女を罵った。

少年に裏切られ、少女は着の身着のまま少年の家をでていった。

酒を買って夜通し飲み続け、泥のように酔っ払った体で、自分の家に帰った。

鍵もかけずに自分の部屋で寝てしまった。

その夜、パパがきた。

少女は暴れたが、抵抗はむなしかった。

朝になると、少女は、もう二度と帰るものか、と捨てぜりふを吐き、家を飛びだした。

リュメール

やがて、朝がやってきた。リュメールの姿が小鳥へと変わる。その頃には南の国の上空だった。眼下に城が見えてくる。

城の庭園から優しいハーブの調べが聞こえてくる。庭園には花を咲かせた木々が植えられ、その中心に黄色い大理石でできた庵が建てられている。ハーブの音色はその庵から響いてくる。

リュメールは足に矢を携え、枝から枝へと飛び移りながら、ハーブを弾く女のもとに近づいた。

女は非常に美しいわけではなかったが、優しい顔立ちをしている。ふっくらとした頬に、健やかな光が宿る瞳。ハーブとともに口ずさむかわいらしい唇。はちみつ色の髪を高く結びあげて、色とりどりの石を散りばめた髪飾りをつけている。

リュメールの心臓は痛んだが、あの弱虫の少年を幸せにするのは、この娘なのだ、と心に決めて羽ばたいた。そして、姫のハーブの先に留まる。

「あら」

姫が小鳥に気付く。小鳥が足につかんだ矢を目にして、驚いて声を上げる。

「まあ、太陽の国の国旗だわ」

国旗と矢がもたらされるということは、神の花嫁になるという意味だった。

生まれた時からそのように教育された姫は、矢を見て覚悟を決めた。

「誰か」

姫は、直ちに侍女を呼んだ。

父王にこのことを知らさなければならぬからだ。

リュメールは軽く羽ばたいて、南の姫の膝に乗った。

「何て、かわいらしい」

あいさつ代わりに鳴いてみせる。その歌声の素晴らしさに、姫は感動して、手元のハーブを引き寄せると、かき鳴らした。

知らせを受けた父王は、王子がこないことを心配したが、待っていてはらちがあかぬと、独断で太陽の国へ先に訪れることにした。

こうして、リュメールは銀色の大きな鳥籠に入れられ、南の姫とともに太陽の国に旅立つことになったのだ。

0 少女

家をでた少女は、毎日、違う男の体を渡り歩いた。

酒場で知り合った男とモーテルで寝ては、その日の宿にした。

体を合わせる相手は、どんな男でも良かった。

体を売ることも覚えた。たまに金を手渡してくる男がいたからだ。

様々な男と寝ているうちに、薬の味を知った。ヤク中の男と寝ることもあったからだ。最初は無理矢理だったが、そのうち、自分から薬を求めるようになった。行為の快楽は、少女のすさんだ心を少しだけ慰めた。酒や薬は日々の苦痛を和らげた。中毒になってしまった薬や酒を、自分からやめることができなかった。薬や酒代を稼ぐために、更に体を売って、それが駄目な時は酒場でウェイトレスをした。自分に何があるかと、他人は関心を持たない。もともと汚れた自分を大事にしてくれる人間などいない。自分に価値があるとは、到底思えなかったからだ。少女にとって、自分自身は大事にする必要がなかった。早くぼろ切れのようになって、人生を終わらせたかった。誰からも忘れられて、塵のように消えてしまいたかった。若々しかった少女の外見は、薬と酒で変わり果てた。まだ十代のはずだが、三十代後半に見えた。のどは酒に焼け、声もしわがれた。体は骨張ってやせていった。薬も男も酒も全部試して、気がつけば、願った通りに少女の体はボロボロになっていた。

5 ジェルミ

ガウンのまま追い立てられたジェルミは、ようやくの思いで森を抜けた。着の身着のまま、太陽の国を目指した。道中、ジェルミはやむを得ず、ものもらいをしながら歩き、飢えをしのいだ。何度も棍棒で追い立てられた。盗人だと怪しまれて、暴力を受けたこともあった。自分は王子だという証拠が何一つないため、ジェルミは生まれて初めて、機転や才覚で面倒ごとを避けるすべを学んだ。殴られて痛い思いをしながら、ジェルミは自分がいろいろな人間に守られていたことを悟った。道々、ジェルミはエトゥワールとリュメールのことを考えていた。甘やかされて育ったことを自覚したいまでは、リュメールに頼っていたことを反省していた。愛されることが当たり前だった。エトゥワールも自分を愛していると信じ込んでいた。あの時、闇の王に束縛されたエトゥワールには答えることのできない質問を、ジェルミは無邪気にしていたのだ。強引にエトゥワールをさらうか、若しくは、諦めてしまわないといけなかったのだ。どちらも選ばなかった自分に、エトゥワールを愛する資格はあるだろうか、と思った。

ジェルミが太陽の国にたどりついた時には、見る影もなく、みずぼらしい姿だった。数回、門戸をたたいたが、衛兵に追い払われた。何度もしつこく近従の名を呼んだおかげで、やってきた近従に確認されて、王子かもしれないといわれた。それでも城には入れてもらえず、ジェルミは最後の手段だと、乳母の名を告げた。半日以上過ぎ、乳母が検分にやってきて、初めて王子だと認めてもらったのだ。

先に戻った従者は、ジェルミとともにいなかったことを隠して、酒場に潜んでいた。湯浴みをすませたジェルミに、家臣がどのような処遇にするかと聞いてきたが、ジェルミは従者を辞めさせるだけに止めた。

王子の留守のあいだに、南の姫が国旗と矢を持ってきたと告げられた。

それを聞いて、ジェルミは胸が痛むのを感じた。エトゥワールのことが思いだされたからだ。

結局、ジェルミは何もできずに戻ってきた。エトゥワールを諦めなければという思いと未練の狭間で、ジェルミの心は揺れた。

そういう気持ちを押し殺して、王子の義務を果たさねばならない。

身支度を数人の侍従にさせ、急いで謁見の間に向かった。

正装したジェルミは、謁見の間で初めて姫を見た。

はちみつ色の髪とどの姫は、笑顔のかわいらしいひとだった。仕草や声も愛らしかった。自分の髪や容姿に似合う服をよく把握している。黄色いドレスを両の手で持って、膝を軽く曲げて、あいさつした。

「ジェルミさま、御機嫌麗しゅう」

「うむ」

銀色の椅子に座ったジェルミは、姫を見つめた。

内心、好きになれそうな姫で良かったと思った。

ふと、姫の傍らに目をやる。そこには籠に入った小鳥がいた。その小鳥に見覚えがあった。闇の城でエトゥワールを悩ませ、リュメールに変身した小鳥ではなからうか。

「その鳥は？」

「はい、矢を持ってきた小鳥でございます」

「矢を？」

ジェルミは眉をひそめる。もしも、この小鳥がリュメールならば、やはり、森に矢はあったのだ。けれど、持ってきたのは南の国の姫。この事実は受け入れないといけない。

ジェルミは長い旅のことをねぎらうと、用意した部屋でゆっくりと休むように、姫に告げた。

式の日取りは一日もかからずに決まった。姫もそれに同意し、改めて嫁入り道具を携えてやってくると約束して、南の国に戻っていった。

式が間近に迫った頃、再び、姫がやってきた。今度は多くの侍従と侍女を連れ、隊列を組んで嫁入り道具を運んできた。

城下町はそれだけでお祭り騒ぎになった。王子と姫の結婚を、国を挙げて祝福した。

式の当日、ジェルミとアーキシェル姫は太陽の塔に上った。

子供ができるまで、ジェルミは妃と別れ、再び太陽の塔に上り、太陽の王となる。

そういう決まりを、ジェルミは何度も復唱した。復唱しながら、自分が太陽の王になったあと、父王はどこへいくのだろう。妃とともに過ごすのだろうか、と考えていた。

厳かに式は進み、太陽の王に祝福され、二人は塔を降りた。

二人は城の西翼を新居とした。子供ができるまでそこで暮らすのだ。

成人したばかりの王子と、年上の姫は、すぐに仲睦まじく、愛し合うようになった。

アーキシェルが西翼棟の庭にある庵で、ハーブを奏でながらジェルミに歌いかける。その声は天使のようだった。

ジェルミはその声を聞きながら読書をし、執務に励んだ。

必ず、その傍らには小鳥がいた。ジェルミは小鳥を眺めながら、闇の城でのことを思いだすのだった。

蜜月の夜、腕に抱いたアーキシエルの白い体を離して、ジェルミは褥の中で寝返りを打つ。すべやかな背にあの手触りを思いだす。冷たく凍えた肌とは違う、暖かなくぼみ。稜線。へそから下のなだらかな丘。指先に反応する声。何もかも違う。

アーキシェルを愛している。けれど、忘れられない何かが、心にわだかまっていることに気付いた。

冷たく絶望した黄褐色の瞳。猫のように細められた目。誰のことも信じないくせに、誰をも受け入れる。ジェルミを拒絶するあの心。ジェルミだけでなく、すべてのありようをも拒絶する倦んだ態度。闇に沈み、暗闇に潜み、常夜に息づく、死のような少女。

急に思いだされ、無性に恋しくなると、真夜中に褥を抜けだし、小鳥のもとへと馳せる。

ジェルミは、どうしてもエトゥワール声を聞きたかった。どうしても知りたかった。まだ覚えているか、愛はあるか、と。

しかし、籠の中に小鳥はいなかった。ジェルミは籠を手に、近くにいるかもしれない小鳥に話しかけた。「リュヌ、リュヌ。ぼくの声が聞こえるか？ ぼくの気持ちを知っているか？ あの時のままのぼくの気持ちを……、変わりなく彼女を愛するぼくの心を……」

そこまでいいかけた時、背後から声がした。

「その小鳥の主人は、リュヌというのですか？ それとも、小鳥の名がリュヌというのでしょうか？ あなたの思いびとの飼われていた小鳥だったのですか？」

背後の声にジェルミは振り向く。

「その小鳥に矢を持たせたのは、あなただったのですか？」

アーキシェルが青い顔をしてたたずんでいる。

「アーキシェル……、寝ているとばかり……」

「あなたが、夜な夜な褥を抜けだすのは知っていました」

ジェルミは後ろめたさに黙り込む。

「あなたの小鳥を見る瞳が優しいことに気付いていました。それは恋人を見る目です。矢を持った小鳥がわたしのもとにやってくるなんて、初めからあなたが仕組んでいたことだったのですか？ わたしの思い違いでしょうか」

何も答えないジェルミに、アーキシェルは泣いて訴える。

「あなたがわたしを見つめる目が、わたしに向けられていないことなどわかっています。あなたが語りかける言葉が、ことごとくわたしにはではないことも……。あなたは思いびとを忘れるために、わたしを選ばれたのですね」

ジェルミは胸を押さえた。諦めなければいけない、二度とあの森へいくことができないこともわかっている。いま、アーキシェルを悲しませることが、よくないこと、これから先を不幸にすることも……。

「確かに小鳥をリュヌとは名付けたが、おまえ以外の女に恋をしているわけでも、思いを寄せているわけでも

もない」

ジェルミはその証拠にと、鳥籠を見せつけた。中に小鳥がいないことをわからせる。

「あの小鳥はいない。ぼくも夜中にこの庭を訪れることはやめよう……」

ジェルミは泣くアーキシェルを抱き寄せた。幸せと愛は別だと。いまは幸せをはぐくもうと。

エトゥワール

庭のどこからか、再び小鳥のさえずりが聞こえるようになった。

そのさえずりも、いまのエトゥワールには無意味なものだった。

ジェルミが去った痛手は大きかった。リュメールだけでなく、エトゥワールもジェルミが何ものか知っていた。

飽きることがあろうかと思っていた。この手でなぶることがあろうかと。

闇の王の印した紋様をジェルミがくちづけていくたびに、心は燃え上がり、体は震えんばかりに愉悦を感じた。

はっきりと愛しているといえたらどんなに良かっただろう。闇の王を恐れずに、ジェルミがエトゥワールを奪い去ってくれたらどんなに幸せだったろう。

リュメールが矢を持って、ジェルミとともに闇の城を去ったことは、エトゥワールにとって絶望にひとしかった。それは唯一の希望や喜びをなくすことだった。

闇の城に絶望と孤独だけが残された。

死が、情夫のようにエトゥワールの褥に横たわる。

涙も涸れた。

声もでない。

夜がくる。

暗闇が広がる。

エトゥワールの傍らに、漆黒のひと影が寄り添う。

怖気の走るくちづけ。生贄の日が近い。

エトゥワールは、眠りの中に逃げることで正気を保った。

リュメール

エトゥワールが目覚めなくなると、リュメールはひとの姿に変身できなくなった。

リュメールには、エトゥワールの絶望が手に取るようにわかった。

苦痛と絶望と孤独を、すべてエトゥワールに押しつけたリュメールにとって、エトゥワールの逃避は責

めることのできない、当然のことだった。

小鳥でいることは、その贖罪だ。

ジェルミと話ができないことは、その罪と^{とが}咎だ。

ジェルミは愛を紡ぐ。それはリュメールやエトゥワールとではない。

ジェルミは愛をはぐくむ。きっとそれが、最良のことなのだ。

0 少女

少女を心配する男がいた。

少女が働く酒場の店長だった。

最初、少女には、店長がなぜ自分に優しくするのか、わからなかった。体が目当てなのだろうと思った。だから、ちよくちよく裸になって、あられもない格好で店長を誘惑しようとした。

そうすれば、金に困らないし、寝泊まりする場所が手に入る。

しかし、そのたびに店長は悲しそうにほほえむだけで、少女に手をださなかった。拳げ匂に自分の服を脱いで肩にかけてくれる始末だった。

「あんたさ、あたしとやりたいんだろ？ 金をくれたら、どんなことでもしてやるよ」

少女はすれっからしのようにいい放った。

店長は首を振った。

「もっと自分を大事にしろ」

それだけいうと、自分の仕事に戻ってしまった。

少女にとって、それは初めての肩すかしだった。なぜか、とてつもなく悲しくなっただけだった。

薬や酒のせいで無理のたたった少女の体は、しょっちゅう高熱をだしたり、禁断症状に苦しんだりした。

少女が体調を壊すと、店長は何くれと世話を焼いてくれた。

最初、父親ほども年の離れた男に反発を感じた。見せつけるように酒場で男と絡み合ったりした。そうすれば、店長も本性を現すだろうと思ったのだ。

けれど、少女が何をやっても、店長の態度は変わらなかった。そんな店長に少女は心をひらいた。相変わらず、何人もの男とは寝たが、だんだんとそのことを後ろめたく感じるようになっていった。

そんな思いを払拭するように、店休日には店の仕入れや雑務を進んで手伝うようにした。いままでしようとも思っていなかったことだった。

それまでは、夜になると様々な男のもとに転がり込んでいたが、これからは店のソファで寝泊まりさせてくれないか、と店長に頼んでみた。

少女は自分を少しでも変えたかった。店長の悲しそうな笑顔を見たくなかった。

店長に対して、いつしか親しみを感じるようになっていた。

店長に特別な感情を抱くようになった。

初めて、自分から酒や薬をやめようと思いたった。パパに襲われる悪夢を見たり、禁断症状に苛まれたりすると、少女はのたうち回って苦しんだ。少女のそばには、常に店長がいてくれた。苦しんでもがき、泣きわめく少女を、店長は優しく抱き締めて、一晩中そうしてくれた。

少女は店長を男として愛し始めていた。

そんな矢先、少女は妊娠していることに気付いた。既に三か月に入っていた。

しかし、誰の子供かもわからない。

少女は、目のまえが真っ暗になる思いがした。子供ができたこと、にではない。自分のそれまでの行為、にだった。

自暴自棄になった少女を、店長は辛抱強く支え続けてくれた。

少女の恐れは、パパとの子供かもしれないというものだった。それは実際、時期的にあり得なかったが、禁断状態で混乱した少女の思考では、まともな判断ができなかった。

しかも、薬や酒の中毒で健康な子供が生まれる確率も低く、産むとなると少女の命も危うかった。

少女は心も体もどん底にあった。店長の手にすがりながら、辛うじて立っているにすぎなかった。

そんな時に、店長が少女に結婚したいと申しでた。もっと少女を身近で支えたい。守りたいといってくれた。

しかし、少女は自分を恥じた。

店長　愛する男に釣り合わないと思ひ込んで逃げだした。

6 ジェルミ

アーキシェルが身ごもった。懐妊の知らせは瞬く間に国中に知れ渡った。

跡継ぎの誕生は、新しい王の誕生と同様に喜ばしいことであった。

ジェルミが太陽の王となる日が間近に迫った。ジェルミとて誇らしくないはずはない。しかし、不安のほうが大きかった。

太陽の王になれば、もはや妃とともに過ごすことはできない。太陽の塔に閉じ込められ、政務と国の繁栄を祈る身になる。

味けない人生だと初めて思った。あれほど父王にあこがれたというのに。

金色の仮面をかぶり、豪華な服を着て、ひとびとに崇められることを、あれほど望んだというのに。

いまは、妃とともに静かに過ごしたいと願っている。

激しい恋も身を焦がす愛もいらぬ。

平凡で平坦な、何事もない穏やかな生活、妃の歌声、何もかもが、どんな宝よりも愛おしかった。

アーキシェルも、浮かない顔つきをしている。何やら悲しんでいるようだった。

妃の大きなおなかをジェルミは優しく撫でる。愛おしげに。別れがたい思いを載せて、撫で続けた。

アーキシェル自身も太陽の王の風習はわかっている。わかった上で婚姻もしたが、もう二度とジェルミと愛を語れないことを思うと悲しいのか、最近は泣いてばかりだ。

けれど、月は満ち、無情にも別れの時はやってくるのだ。

陣痛が始まると、ジェルミは部屋を追いだされた。

部屋の外で、ジェルミは心もとなく、赤子の誕生を待った。

朝日が昇るとともに産声が上がった。

リュメール

ジェルミの妃が臨月を迎えた知らせは、闇の城にも伝わっていた。

かましい魔物たちのおしゃべりを、目を覚ましたエトゥワールは苛立ちながら聞いていた。

眠りに逃避しているあいだに、自分の半身でもあるリュメールが消えてしまった。それだけでもかなりの痛手だというのに、愛してやまないジェルミに子が生まれる。

あの時、ジェルミを縛ってでも拘束すれば良かった。自分だけのものにして宝物のように閉じ込めてしまえば……、エトゥワールの心中をそんな思いが渦巻いた。

けれど、もはや遅い。たとえ、そうしていてもジェルミを苦しめるだけのことだろう。

エトゥワールは体中を這う紋様を見やる。けがれた自分の体。子が生まれる頃には、完全に闇の王のものになる生贄。

なぜなのか。ここにきた時から、生まれた時から決まっていた約束だと聞いた。

「おまえはわたしのもの。その髪からつま先まですべて」

闇の王はくちづけのたびにそう囁いた。それは愛の告白ではなく呪いだった。言葉の蔦が^{いまし}縛めのように体中にはびこっている。

更にリュメールが自分を見捨てた時に、エトゥワールの心は死んだのだ。小鳥は、エトゥワールの良心だったからだ。

エトゥワールは、おとなしく最期を待った。

時がきて、見えない侍女たちがエトゥワールを飾り立て始める。黒い羽根飾り。漆黒のドレス。薄絹の黒い足通し。黒く着飾った花嫁は庭にでて、闇の王のまえにひざまずいた。

どんよりとした闇を背負う王の姿は、夜の中に沈み込み、わずかな明かりに照り返る布地以外に、姿は判然としない。黒い仮面は、闇そのもので形作られたようだ。

そろそろ、明けの明星のまたたきが激しくなる。夜明けがくるのだ。引き潮のように漆黒の闇夜が引いていく。太陽の最初の光が差し込み始めた。

夜が明け、エトゥワールの解放の時がきた。それは生からの自由だった。

「産声だ」

闇の王、オプスキュラがのたまう。城にすまう小さな魔物たちが悲鳴を上げる。

(うぶごえだ！)

(みこがうまれた！)

「こい、エトゥワール」

漆黒のマントがひらく。

エトゥワールは無表情でオプスキュラに歩み寄る。死との婚姻が始まる。

オプスキュラが仮面をずらす。その下の美しい顔が垣間見える。冷たい唇がエトゥワールの唇をはむ。

エトゥワールとオプスキュラの周囲を、小鳥が激しく鳴きながら飛び交った。

リュメールだった。

リュメールはエトゥワールの肩に留まり、生気をすするオプスキュラに向かって鳴きたてた。

そのあいだにもエトゥワールの顔から、徐々に生気が失われていく。見る間に色あせていく。小鳥も次

第に動きを止め、苦しげにさえずった。

とうとう、エトゥワールの体から命が奪われ、オプスキュラの胸にぬけがらだけが残った。
新たに一体のアラバスタの像が現れた。その肩には石細工の小鳥が乗せられている。
エトゥワールとリュメールは、命を奪われ、石にされてしまったのだった。

0 少女

男から逃げだした少女は、住み込みの仕事を始めた。安い賃金で重労働を強いられた。外国人労働者が大半を占めている。職場の責任者は労働者に対して非情だった。

体力を失っていた少女は、数週間もしないうちに仕事に倒れた。

職場の人間たちは、気絶して破水した少女を何時間も打ち捨てていた。構っていることができないくらい忙しいのと、責任者すら少女を無視していたためだった。

そのために少女の子供は死んだ。

少女が目覚めると、そこは病院だった。どうやって病院に運ばれたか、全く記憶にない。

少女は周囲に目をやった。

ベッドの脇にひたむきな目で自分を見つめる男がいた。それは、少女を愛してくれている男だった。

瞳に涙が溢れた。

「どうして、あたしがいる場所がわかったの？」

少女は素直に訊ねてみた。

「常連の一人がおまえを見たと聞いて駆けつけたんだ」

男は毎日少女を探していたらしい。酒場の客から、少女の行方を聞いて駆けつけた時には、既に遅かったという。危うく死にかけた少女を病院に連れていき、意識が戻るまでそばにいたのだ、と男は語った。

それを聞いて、少女は逃げるのをやめようと思った。

男の愛と向き合い、過去の自分から逃げるのをやめ、立ち向かおうと心に誓った。

パパやママとのことも、自分なりに決着をつけたいと願った。

そうでないと、少女はいつまで経っても、男のまえに堂々と立つことができない。対等になることができない。男の愛に^{こた}へることができないのだ。

少女の話を、男は静かに最後まで聞いた。

支離滅裂になりがちな話だったが、男は少女の決意を汲んでくれた。

だったら結婚を両親に知らせるために、少女の実家を訪れよう、と男は持ちかけた。

幼い頃から自分を苛み続けた恐怖と、少女は立ち向かうことにしたのだった。

ジェルミは生まれた子供を目のまえにして、不思議な気持ちになった。

赤子は二人。男の子は自分と同じ灰色の髪。女の子は妻と同じはちみつ色。

赤子は小さく、並んで眠る姿はいとけなかった。こんなにかわいい我が子ともこれでお別れなのかと思うと、大いに残念だった。

別れの思いは押しやって、ジェルミは、赤子の誕生を妃とともに喜んでいた。

その時

ふいに寝室に闇が垂れ込めた。

何事かと、ジェルミは我が子と妃をかばって、闇に立ち上がる。

闇は次第に形を取り、黒い仮面をかぶった男の姿となった。黒い衣服の下から現れた、白い指先が赤子を指差した。

「未来の王よ、その女子は我が花嫁としてもらい受ける」

それは恐ろしい言葉だった。

「誰がそんなことを！」

ジェルミは我が子を守るために、腰に帯びた剣を抜き、闇の王に飛びかかった。

しかし、闇はすりとジェルミの腕から逃げ、次の瞬間には赤子を抱いていた。

「繁栄と引き替えに、おまえの一族が約束した。生まれてくる姫は必ず闇の王に嫁がせる、と」

アーキシエルが悲痛な叫びを上げる。

「おまえにわたしの子供を渡すいわれはない！ いますぐ返すんだ！ それに、おまえには既に花嫁がいるだろう！」

闇の王は不気味に嗤った。

「そうだ、おまえの妹であるエトゥワールとリュメールは、このわたしが花嫁として手に入れた。いまでは我が庭に乙女の像となってたたずんでいる」

「何だって？」

ジェルミは悲痛な声を上げた。

「どういうことだ？ リュメールもエトゥワールも、わたしの妹だということか。あんな恐ろしい場所に閉じ込めて苦痛を与えておきながら、命まで奪ったということか！」

「愚かな男だ。わたしは、いままで呪いを解く機会を与えていた。一生に一度の救いだす機会を与えていたのに、それを無駄にしたのは、おまえの一族だ。成人の儀式の時に飛ばす矢を、必ず闇の森に導いていたのに、いつのまにやら花嫁探しにしてしまっていたのも、おまえたちだ。しかも、矢を見つけられず、矢が落ちていた、と自ら偽っていたではないか」

「しかも、おまえはエトゥワールを救いだす機会があったのに、一人で逃げだした。エトゥワールの良心であるリュメールさえ、連れだせなかったではないか」

闇の王は嘲るような嗤い声を上げる。

やがて部屋は暗くなっていき、まだ名もない姫は闇の王とともに暗闇に飲まれ、そのまま消え去った。

「何ということだ」

ジェルミは激しい感情をあらわにした。それは、いままで感じたこともないほどの怒りだった。それと同時に連綿と続いた愚かな行為に呆れ果てた。闇の王のいう通りなら、愚かにもほどがある。救いの機会

を捨ててきたのは、自分の一族だった。

救いられなかった妹と双子の我が子とが重なる。

エトゥワールとリュメール。彼女たちはジェルミの妹なのだ。一つの魂を二つに分けて、闇の王の苦痛から我が身を何とか守っていた妹。

この儀式が自分にも行われたこと、心から愛した女が自分の妹だったことを、闇の王の言葉で悟った。

アーキシェルが背後のベッドの上で泣いている。王子も火がついたように泣き始めた。

「まるで呪いだ……」

ジェルミはそう吐き捨てた。

「何が繁栄だ……、こんなものは呪いそのものだ……」

ジェルミは泣きじゃくるアーキシェルを胸に抱いた。

それなのに、侍従や侍女たちは、ジェルミと王妃の様子に目もくれない。慌ただしく儀式の準備をしている。いつも通りの宮殿の様子が薄気味悪い。

戴冠の儀式が迫ってくる。ジェルミは誰にも悟られないように小刀を胸に忍ばせた。

儀式のために正装したジェルミは、太陽の塔への階段を上り詰めていった。

階段の一番上には、父王が腕を広げて待っていた。

「我が息子よ、おめでとう」

金の仮面の下で父王がいう。

ジェルミは奥歯をかみ締めると、胸の下にある小刀を握り締めた。

「その懐刀は必要ない」

すべてを見透かしたように、太陽の王はつぶやいた。

「もはや、おまえはわたし自身となる」

ジェルミは太陽の王に抱きとめられる。ジェルミはやみくもに暴れ、その仮面をはぎ取った。

闇。

そこには何も無い。

ジェルミは、闇の王の仮面を垣間見たように思った。

太陽の王は、人間の力とは思えないほど強く、ジェルミを羽交い締めにした。父王の腕の力が強くなるほど、ジェルミの体から力が抜けた。恐怖がジェルミの全身を覆う。このままでは死ぬという思いから、絶叫がのどを突いてでた。

ジェルミの悲鳴を飲み込み、太陽の王は息子の体をマントの中に包み込む。片方が塵となって消えてしまったあと、そこに立つのは仮面をかぶったジェルミだった。

太陽の王に肩をつかまれ、マントの中に引きずり込まれてから、ジェルミの意識はなくなった。次に気付いた時、ジェルミは上空から自分の姿を見つめていた。

金の仮面をかぶりなおした、金の髪の自分自身が、民衆に手を振り、塔のテラスに立っている。

仮面の下顔は、闇そのものだった。

闇の王と同じ漆黒の闇が、マントの中にも泥のように凝^こっていた。

闇の王と太陽の王は同じ魔物なのか？

太陽の王と闇の王は繁栄を与える代わりに、その報酬として命を奪った。何代にも亘^{わた}って続けてきた、忌まわしいいきたりの正体は、呪いとしかいいようがなかった。

先代たちがいままで何もしてこなかったことが信じられない。その誰もが自分に妹がいることも、その妹が苦しめられていることも知らずに、太陽の王になることだけを夢見て生きてきたのだろう。

矢が見つからなかったのはジェルミだけではなかったのだ。さらわれた妹のところに矢が導かれていたのに、先代たちは闇の森を探さなかった。

あるはずがないという思い込みが、矢と妹を見つけだす、たった一度の機会を無駄にしてしまっていたのだろうか。それとも、最初ジェルミが闇の王を恐れたように、先代たちも恐れていたのだろうか。

恐らく、エトゥワールとリュメールの存在を知らねば、ジェルミもその一人となっていただろう。

魂の姿でいる限り、誰にも真実を告げることもできず、離ればなれになったことを嘆くアーキシェルに自分の死のことを知らせることもできない。

さらわれた赤子を取り戻し、ジェルミの妹であるエトゥワールと小鳥のリュメール、彼女たちを何とか助けだそうと、ジェルミは空を駆けた。

あれほど遠かった闇の森まで、あっという間だった。新しい花嫁を得た森は、ざわついている。

ジェルミは城の尖塔を目指す。中庭を上空より見下ろし、そこにアラバスタ細工の乙女たちの像を見つけた。

「エトゥワール！」

ジェルミは叫び、真新しい像の足元に降り立つ。

かつての恋人でもあり、妹でもあるエトゥワールのぬげがらが、そこにたたずんでいた。リュメールも石となって、エトゥワールの肩に留まっている。

「エトゥワール、リュメール……」

話しかけても応えはない。生気のない瞳を覗き込み、ジェルミは悟る。

妹は本当に死んだ。この世から消えてしまった。しかも、それは未来の姫の姿でもあり、現在の自分でもある。

アーキシェルとともにいる赤子の王子は、いずれ自分と同じ道をたどる。

ジェルミの怒りがふつつつとたぎった。止めなければ。自分でこの連鎖を止めてしまわないと、永遠に続く。

太陽の王と闇の王。あの二人はもしかすると同じ存在なのかも知れず、父の顔をして、花婿の顔をして、生贄を求め、見返りに繁栄を授ける悪魔なのかもしれない。

繁栄と、この呪い。いままでの王子は従順に何も疑問を抱かず、受け入れてしまったのか。なぜ、もっと呪いに対して抵抗し、闘ってこなかったのか。

ジェルミは憤怒の思いを胸に、妹の像を抱き締めた。すると、ジェルミの魂が空っぽの像の中に入っていくではないか。魂が空の器にすっかり収まってしまうと、次第に体になじんでいった。

ジェルミはぎこちなく体を動かした。いままでその体で生きてきたかのように、違和感はなかった。

ジェルミはエトゥワールの声で呼ばわった。すっと立った姿はエトゥワールそのもの。

黒いドレスを翻し、黒い手袋をはめた指で太陽の塔の方向を指す。

「闇の下僕ども、我がもとに集え、太陽の塔へ向かうぞ」

闇の城から、闇の生きものがわらわらと現れる。小さな魔物たちは地より這いでて、先ほどまで立像だったエトゥワールをいぶかしげに見た。

エトゥワールとなったジェルミは、魔物を踏みつけると、続けた。

「わらわに従え、下僕ども」

命じながら、まるで生まれた時からそうしてきたように感じた。魂は体に完全になじんだ。ジェルミは無意識にエトゥワールとなった。

魔物たちはその無体な態度で、直ちにエトゥワールを主人と判じて、命令に従った。

エトゥワールは、魔物の群れに混じる、一角の黒い天馬に、こちらにこいと合図する。エトゥワールは天馬に腰かけ、闇の軍勢を引き連れ、南に向かった。

0 少女

少女は、両親が自分の結婚のことを喜ばないとわかっていた。

案の定、パパは怒鳴り、ママは泣き叫んだ。

どこの馬の骨かわからない中年の男を選んだとあって、少女を二人して罵った。

感情的になった両親は、ヒステリーを起こしたように、駄目だと繰り返すだけだった。

男は冷静に説得した。少女を必ず幸せにすると誓った。

けれど、両親はそのことが重要なわけではなかった。

ただ一点。少女が自分たちの思う通りにならないことが不満のようだった。

「このあばずれが！」

いきなり、パパが少女を殴った。

ママはただ泣きわめくだけだった。

男は少女を守ろうと、パパと少女のあいだに入った。

パパが男を殴り始めた。拳げ匂にうずくまった男を蹴り始め、男の頭に手近な鈍器を振り下ろそうとした。

「やめて、やめてえ！」

少女は必死で止めに入ろうとした。そこをママが羽交い締めにしてやめさせる。

「パパがあんたの将来を決めるんだ。こんな男のことなんか忘れちまいな」

「おまえはおれのいう通りにしてたらいいいんだよ！ こんなやつ殺しちまったほうがいい。そうすりゃ、ろくでもない親不孝なおまえにも、親の愛情ってもんがわかるだろ！」

少女は両親の言葉にぞっとした。

パパは床に這いつくばる男を蹴り続ける。

このままだと男は本当に殺されてしまう、と錯覚した少女は、手元にあった灰皿をつかんだ。

エトゥワールは、漆黒の軍勢を引き連れ、丘陵を黒に染め上げて、太陽の国を目指した。暗雲のような軍勢を見て、ひとびとは逃げだした。闇の王がとうとう攻めてきたのだ、と口々に叫んだ。その言葉を耳にして、エトゥワールは嘲笑った。既に魔物に支配され呪われた太陽の国に、いまさら何の救いがあるかと。エトゥワールの魂となったジェルミは泣いた。失われてしまった自分の妹。かつて共に過ごした自分の片割れ。彼女たちの復讐を果たす時がきたのだ。奪われた自由や意思を取り戻せはしないが、確かにここにいたのだという主張を、悪魔に知らしめるのだ。

太陽の塔のまえにある階段に降り立つと、黒いドレスを翻し、声を高らかに呼ばわった。「太陽の王、それとも闇の王と呼ぼうか！　いまこそ、素顔を隠した仮面をたたき割り、この国にかけられた悪魔の呪いを解いてやる！」

宮殿のひとびとは阿鼻叫喚の中、逃げまどった。テラスから外を見たアーキシェルは、幼い王子を抱いて、立ちすくんだ。宮殿の西翼からも、魔物たちの黒い霧のような大群が、太陽の塔を取り巻いているのが見える。

エトゥワールは、両手で思い切り金の扉を押しひらいた。凄まじい音とともに門はひらく。中は漆黒の闇。しかし、闇に慣れたエトゥワールにとっては我が住みか^かに戻ってきたようなものだった。

魔物を引き連れ、塔内部の螺旋階段を上り詰めていく。その最上階の部屋に、金の仮面をかぶった太陽の王がたたずんでいた。

「何をしにきた、屍人よ」

「屍人ではない、自分の体を取り戻しにきたのだ」

金の仮面から嗤う声が漏れる。

「何をいう、もはやおまえに体が必要だろうか」

ジェルミは怒りに目がくらむ。

「わたしは何も手放しはしない。だが、見返りを求める繁栄や栄光はいらぬ。欲しいのは自分自身だ」

エトゥワールは叫びながら太陽の王に飛びかかり、その仮面を手近にあった鈍器で殴った。鈍い音がして、床に仮面が落ちる。二つに割れた仮面には、闇がこびりついていて、仮面の下に、もう一つ黒く歪んだ面が現れた。

「愚かもの、愚かもの。これでこの国は終わりだ。何もかも終わりだ」

闇のように黒い顔はそういうと、霞むように消えてしまった。

ジェルミの体は戻らなかった。

太陽の王であり、闇の王でもあった悪魔は退散した。しかし、まだ息を潜めてエトゥワールの行動を見張っているかもしれない。

エトゥワールは肩で息をした。慚然とした面持ちで、床に落ちた仮面を睨みつける。気付けば、辺りは薄闇に包まれている。引き連れていた魔物の姿もない。

徐々に暗くなっていく世界に、エトウワールは銀色の光を見た。

0 少女

気がつくやうに、鏡が割れている……。

少女は鈍器で鏡を割ってしまったのか。

瞳には熱い涙。赤くはれた唇には血がにじんでいる。

失われたものはもう戻らない。けれど、再びはぐくむことができる。

つらい過去のこと、子供を失ったこと、新しい恋人とのこと。走馬燈のように駆け巡る。

鏡の中に作り上げた物語は、割れた破片と一緒に足元に飛び散っている。

割れた鏡の中に少女は見る。

取り戻した双子を抱く女。床に倒れた一人の青年。復讐を遂げてこの世を去った少女。

空想の中で彼女は幾つも人格を作ってきた。傷つけられ痛めつけられる少女と、奪われ取り戻す少年。

彼らを眺め、見守ってきた小鳥は自分。二人から守られながら、苦痛から逃げた。

けれど、今度は立ち向かう。逆境に、運命に。

自らの命を脅かす悪しき連鎖は断ち切らないといけない。

手に握った灰皿が血に濡れている。

ママの叫ぶ声、男の少女を呼ぶ声がする。

少女は意識の扉のまえに立つ。この閉ざされた暗い部屋からでていかねば。

ようやく決意し、目をひらいた。

パパは額から血を流し、驚愕の目で少女を見つめていた。

「でていけ！ このあばずれ！ この家からでていけ！」

少女はパパの怒鳴り声に足がすくむ。少女の背を恋人が支えた。

「いこう、わたしたちの未来のために」

少女は両親に背を向け、忌まわしい過去に彩られた家の外へ、ようやくでていくことができた。

文：設楽土筆（したら・つくし）

<http://hiou.bbplus.net/>

昔は幻想小説。今はいろんなジャンルに挑戦してます。得意な(好きな)分野はファンタジーです。最後まで書き終えることが目標です。

ツイッター：<http://twitter.com/shitaratukushi>

絵：色崎（しきざき） - イラスト特別提供 -

普段はまったり絵や文をかいています。素敵な企画に参加することができて嬉しいです。

行きゆく
人に秋の
夕暮れ



薄の土手。
風わたる松林。
落日に染め上げられた
風景の中、
そぞろ歩く人。
その歩みの先には……
幽玄ショートショート

梓寝子 illustration
damo

秋は好きだ。特に秋の暮れ方はいい。

門を出て夕日に赤く燃える土塀の間を歩くと、川辺に出る。川は黄金色から紅に染まりながら、緩やかに流れて行く。土手の薄は川面に映え、白銀に輝いている。

橋が在る。古風な太鼓橋だ。渡り口には大きな石造りの常夜燈が在り、夕日の中に濃い長い影を引きつつ、深紅に聳えている。

時々立ち止まりながら、ゆっくりと橋を渡る。橋の向こうは、薄の原だ。道はだらだらとその中を下っている。川風が密やかに生じさせる薄の幽かな衣擦れを聞きつつ、夕日に向かって下って行く。

薄の原を抜けると松林が在る。林を通して遠い山並みが黒々と迫ってくる。山の端に行く赤い巨陽は重苦しい沈黙を呈している。何処からともなく吹いてくる風は、^{しょうしょう}蕭々と松の梢を渡って行く。

足を止め、斜陽を背景に^{あおあお}緑々と浮き出している松林を暫し眺める。松林は海岸へ向け、^{えんえん}蜿蜒と続いている。

唐突に、足元から犬の吠え声がある。パグと思しき犬がこちらを見上げて、吠え付いている。

「ハチ！ 何吠えてるのよ！ もう！」

リードを持つ若い女が声を上げる。

こんなパグ犬が「ハチ」とは。少し映画が流行れば、直ぐに同じ名前の犬が増える。子供の名前までがそんな調子の世の中だから、犬などは致し方ないのか。思わずの微苦笑で、吠え付く丸い目のとぼけ顔を見詰める。その視線に犬は気分を害したのか、更に激しく吠え立てる。

「ほんと、何吠えてんのよ！ 止めてよ！ ハチ！」

若い女が激しく声を荒げて、犬は全く言う事を聞かない。こちらへ向かって吠え続ける。若い女は、この小さな犬に完全に馬鹿にされているようだ。犬と言う生き物は、上下関係をしっかりさせていないと、付け上がるものだ。

「もう夕方なんだから、さっさと帰らないと！ 秋の夕方って、ヤバいんだから！ 直ぐに暗くなっちゃって、最悪！ この、バカ犬！ 迷惑犬！ ぐずぐずしないでよ！ ハチったら、ハチ！ もう！ 早くっ！ こっち！」

若い女は何の挨拶もなく、吠え続ける犬をそのままぐいぐいと引いて行く。

最近、川上に出来た高層マンションの住人だろう。風情を解さぬ無礼な輩だ。^{うしろすがた}後姿を見送りながら、溜息をつく。

ふと見遣ると、道の少し前方に家が在る。土塀を廻らせた古民家だ。こんな所に、家が在っただろうか。訝しく思いつつも近付く。

大勢の人が集まっている。

「夕方、あの松林の所でお亡くなりになっていたそうですよ」

「秋の夕暮れがお好きだったんですって」

「それで、こんな夕方にお葬式を……」

秋の夕暮れが好きな人 何となくゆかしく思い、非常識も省みず門の中へと足を踏み入れる。祭壇は夕日の中に燃えていた。その中央高くに置かれた遺影が、赤く斜陽光を反射する。

と、突然、見えた。赤い巨陽の斜光が眼前の緑松林を黒く焦がし、人の胸を貫くさまが。松が枝を^{しょうしょう}蕭々と渡る風のための静寂の中、胸を押さえ、脚を折る人。松風は何時もと変わらず、^{えんえん}蜿蜒と続く松林を吹き渡って行く。風が去った後の、^{せつな}刹那の幽玄。そこに、声が大きく響く。

「おい！ ここに人が倒れてるぞ！」

「えっ？ どこ？ ……ほ、ほんとだ……」

祭壇を見上げたまま、呆然と立ち尽くす。中央に掲げられていたのは、夕日に照り映える紅葉の中で微笑んでいる私の写真だった。

了

文：梓寝子（あずさ・ねこ）

<http://genyayori.web.fc2.com/index.htm>

小学校時代から欠席が多く、学校へ行けない日々が発生した他愛も無い妄想から生まれた「'異世界' 世界の物語」を綴っております。

絵：damo（だも）

<http://applechair.sakura.ne.jp/circuit/>

何かすこしでもお手伝い出来ればと思い、参加しました。

作品の彩りになるような表紙になっていれば幸いです。

無音の響き[#]

「RはリドルのR」シリーズ

欠けたオルゴール。
大切な人へのプレゼントのはずなのに。
壊れた？ 壊した？ それとも——!?
青春ミステリー

GB (GreenBeetle 改め)

illustration **yanagi**



「ヒーカーリー！ たーすけてー！」

初夏のキャンパスに、素っ頓狂な声が響き渡る。

名を呼ばれたひながたひかり雛方光は、渋々といった様子で足を止めた。大きな溜め息一つ、ウェーブがかったメディアムヘアをばさりと揺らして、声の主を振り返る。

「助けて、ヒカリ！ 壊しちゃった！ サトル兄ちゃんのっ、姉ちゃんがっ、姉ちゃんできっ、おこっ、おこっこ、怒られるー！」

勢い良く駆け寄ってきたのは、ヒカリの友人の松山まり万里だった。さらさらのショートヘアを振り乱しながら、半べそをかいて、助けてくれと繰り返す。

ヒカリはもう一度大きく息を吐き出してから、やれやれ、と両手を腰に当てた。

細身ながらもメリハリのきいたスタイルのお陰で、見た目性別を間違われる事は無いものの、ガーリーな万里の横に立つと、ボーイッシュなヒカリは、まるで女形か男役といった風情だ。

剣道部の紅一点を三年間経験すれば、誰だって男らしくなる、というのがヒカリの持論だが、誰だって、の部分に異議を唱える者は少なくない。

「ちょっと落ち着け。誰が何をどうしたって？」

「だから、壊してしまったの！ どうしよう、ヒカリ、直せる？ 直せないよね？ 同じの、どこかで売ってないか知らない？ ああ、どうしよう、姉ちゃんに殴られるー！」

パニックを起こして頭を抱える万里を、ヒカリは黙って見守り続けた。この万里という人間は、下手になだめたり慰めたりすると、余計に焦って更なるドツボに嵌まりゆく傾向があった。その事を、ヒカリは三年間の高校生活を通して、骨の髄まで思い知っていたのだ。

ひとしきり百面相を繰り返したのち、万里はようやく落ち着きを取り戻した。その間にヒカリが知りえた情報は、たったの一点だけ。万里の家の近所に、彼女の姉の同級生であるサトル兄ちゃんとやらが住んでいる、という事のみである。

「落ち着いたか。なら、順を追って話せ」

「うん。だから、オルゴールなのよ。どうしよう？ どうしたらいい？」

「順番に、だ。いいか？ 頭から順番に」

「う、うん。だからね、今日、姉ちゃんの誕生日でね。朝にサトル兄ちゃんが、プレゼント持ってやってきて、生憎姉ちゃんは演奏会前の合宿で留守で、とりあえずプレゼントを預かったんだけど……」

大学生協前の木陰のベンチに、並んで腰を下ろすや否や、万里はまたも興奮した面もちでヒカリに迫ってきた。

「それがね、壊しちゃったみたいなのよ！」

ヒカリは、馴れたものと言わんばかりの表情で先を促した。

「オルゴールを？ 落としてしまったとか？」

「ううん、落としてもぶつけてもないよ」

「それなら、なんで壊れたって分かるんだ？」

「……………」

ヒカリの問いを聞いた途端、万里の目がいきなり泳ぎ始めた。

「待て。もしかして……」

刺々しいヒカリの声音に、万里はあたふたと両手を振りまわした。

「だって、あのサトル兄が姉ちゃんに何渡すんだろ、って、気になって……」

「……他人へのプレゼントを開封したのか……」

がっくりとヒカリが肩を落とす。

「開封ってたって、箱剥き出しで、この紙袋にぞんざいに突っ込んであるだけだったし……、しかも箱の蓋、封されてなかったし。って言うか半開きだったし！」

冷やかなヒカリの眼差しに負けじと、万里が両手を固く握り締めた。

「だってだって、お互い気にしてるのバレバレの状態、もう十年だよ？ 今更何をプレゼントするんだろ、って気にならない？」

「つまり、お互い意識合っている男女の、その男のほうが一発発して贈ったプレゼントを、贈られた本人のいないところで、その妹が勝手に開封して、壊してしまった、と」

ヒカリはそこで小さく溜め息をつき、それからナイフのごとき一瞥を万里に突き刺した。

「最悪だな」

「反省してマス」

身体を小さく縮ませた万里が、神妙な声で頭を垂れた。

「正直に話して、怒られな」

「そうだね……。やっぱりその場凌ぎはだめだよ。マジ殴りされるかもだけど、きちんと謝るよ」

弱々しくうなだれる万里が、微かに身を震わせているのを見て、ヒカリは思わず首をかしげた。

「殴られる、って、万里の姉ちゃんって、そんなキャラだった？ 優雅にピアノ弾いているところしか知らないんだけど」

「それは思いっきり騙されてるって。怒ると、それはそれは凶暴なんだから」

「へー、意外だ」

佳人の思わぬ一面に感心する一方で、ヒカリは眉間にそっと皺を寄せた。

ヒカリと万里は、高一で同じクラスになって以来の腐れ縁だ。長い付き合いのお陰で、お互いの長所も短所もそれなりに把握し合えている。

そう、ヒカリの知っている万里は、確かにおちょこちょいの調子乗りであるが、礼儀知らずではない。姉妹同士という事で対応が多少ルーズになったのだとしても、彼女が他人への贈り物をぞんざいに扱うとは、ヒカリにはどうしても思えなかった。

「ちょっと、それ見せてみ」

「あ、うん」

万里が弾かれたように背筋を伸ばして、紙袋の中へと手を突っ込んだ。滑稽なほど急いた様子で、小さな箱を引っ張り出す。

箱の蓋が開いた瞬間、眩い反射光がヒカリの目を射た。

箱から出てきたのは、一辺が五センチほどの透明な立方体だった。何の飾りもついていないアクリルの正六面体の中、真鍮色のムーブメントが、まるで宝物のように鎮座している。箱の横に突き出した小さなハンドルが、シリンダの動力源なのだろう。良く見ると側面の下部に小さなかみ合わせがあり、どうやら底辺が外れるようになっているらしい。

ヒカリは、木陰の映り込みを避けるようにして、箱の内側へと目を凝らした。それから、大きな溜め息をついた。

「これは、直せんなあ」

ゼンマイ式ではなかったが、その構造は普通のオルゴールと同じ。回転するシリンダに植えられた小さなピンが、すぐ横に設置された金属製の櫛の歯を弾いて音を出す。その、幅僅か一ミリほどの歯の一本が、途中で折れて、短くなってしまっていた。

「瞬着（瞬間接着剤）で……とか、無理かな？」

「この狭い断面じゃ接着出来ないだろうし、仮に着いたとしても強度がもたない。そもそも外見を取り繕っ

たところで、元通りの音が出るわけが無い。つうか、このカケラはどこ？」

「それが……、見あたらないのよ」

「じゃあ、何を接着するつもりだったんだ？」

呆れ返るヒカリの視線を避けるように、万里は小さく身をすくめた。

「何か……カケラの代わりになるものが無いかなあ、って……」

「あると思う？」

「ああ、やっぱりいいー？」

万里が悲劇のヒロインさながらの身振りでその場に突っ伏した、その時、ベンチに何かの影が差した。

「最初っから折れてた、って事は無いのか？」

驚いて振り返った二人の目の前、一人の男子学生が立っていた。

「原田さん」

「妖怪退散」

ヒカリの声をあっさり聞き流して、原田嶺は「よう」と軽く右手を上げた。

原田は、ヒカリと同じ機械工学科の、二年上の先輩だ。男子にしては少し長めの髪をゆるく首の後ろで括り、ダメージジーンズを嫌味無く着こなしている姿はそこそこ絵になっていて、一回生女子の間で一時「カッコイイ上回生がいる」と噂になった人物だ。

だが、学部の新歓コンパでの顔合わせ以来、ヒカリアは原田とは馬が合わないと公言して憚らない。曰く、調子が良過ぎる、調子に乗り過ぎる、年長者とは思えない、と。いくらヒカリアが女らしくないからといっても、遠慮も配慮も何も無い男同士の会話を、顔を合わせるたびに年下の女性に屈託無く振ってくるその態度は、ヒカリアをして「ふざけるな変態」と言わしめるに充分だろう。

そもそも一般教養を中心に履修する一回生と、専門の授業が大半を占める三回生とでは、広いキャンパス内で顔を合わせる機会などあまり無いはずだった。だが、どういうわけかこの二人は、同じタイミングで同じ場所に居合わせる事が多く、そのたびにヒカリアの眉間の皺は深さを増し、拳げ句の果てに、学部の違う万里までもが原田と顔見知りになってしまっている、という有様だった。

あからさまに嫌そうな表情を見せるヒカリアに対し、原田は至極愉快そうに片眉を上げ、それから一転して真面目な表情で万里のほうに向き直った。

「確かに、自分宛じゃないものを、勝手に開けるのは問題だけど、でも、松山さんは他人のものを粗末にするような人じゃないだろ？」

その言葉に、万里の表情がぱあっと明るくなる。

心の中のもやもやを、第三者に、特にこの男に炙り出されてしまった事に、ヒカリアは思いきり顔をしかめた。

「盗み聞きとは、良いご趣味で」

「一方的に聞かせておいて、随分な言いぐさだな」

原田が憮然と二人の背後を指差した。

綺麗に刈り込まれた植え込みの向こう側にもベンチがあった事を、二人はすぐに思い出した。

「内緒の話ならもっと場所を選べよな」

「すみません」

素直に頭を下げる万里に向かって、原田は少し慌てて両手を振った。

「いや、松山さんが謝る事じゃないから。毒舌家を気取る短絡馬鹿に反論しただけだからさ」

彼はそうニヤリと笑うと、齒軋りせんばかりのヒカリアを華麗に無視して、涼しい顔で万里の手元を指差した。

「それよりも、そのオルゴール、ちょっと見せてくれないか？」

「いいですよ」

手渡されたオルゴールに真剣な眼差しを向ける原田を、ヒカリが意趣返しも露骨に、盛大に鼻で嗤う。

「最初から折れてた、って、どこの世界に、好きな相手に不良品をプレゼントする阿呆がいる？」

「なら、破片が無いのをどう説明するんだ？」

「それは……」

万里が失くしたから、と続けようとして、さしものヒカリも躊躇った。先刻この男が言ったように、万里は他人のものをいい加減に扱うような人間ではないのだ。

ヒカリが、ぐ、と言葉を呑み込んださまを見て、原田が微かに笑った。

腹立たしい、とヒカリは思った。口論相手を言い負かしたのだから、もっと根性悪い笑みを浮かべればいいものを、何だその上から見下ろさんばかりの尊大な微笑みは、と。

「察するに、箱を開けて、中身がオルゴールだと知って、何の曲だろう、ってハンドルを回したら音が飛んでいて、慌てて箱や袋の中を確認したけど、破片は既にどこにも無かった、ってどこじゃないの？」

「凄い！ 原田さんってば、シャーロック・ホームズみたい！」

いやいやそれほどでも、と調子の良い返事を万里に投げてから、再び原田はヒカリのほうを向いた。

「さっき雛方自身が言っただろ。送り主が不良品を用意するはずが無い、って。だが、現にオルゴールは壊れている。ならば、自分が壊したのかもしれない、って、ありがちな思考の流れじゃねーか？」

返す言葉が見つからずむっとするヒカリをよそに、原田はオルゴールのハンドルを回し始めた。

シリンダの回転とともに、懐かしい旋律が小箱を震わせる。メロディに合わせて、原田が小さな声で歌いだした。

「うさぎ美味しい……」

「うさぎ追いし」

咄嗟にそう訂正をかけてから、ヒカリは「しまった」と齒軋りをした。原田の満足げな表情を見る限り、どうやら今のはツッコミ待ちのボケであったらしい。

二人の水面下の戦いに気づかない万里が、にっこりと曲名を補足した。

「『ふるさと』って歌ですよ」

「そうそう、平和なタイトルのわりに、ウサギ狩ったりコブナ釣ったり、サバイバルな歌詞のやつだ」

そう上機嫌でオルゴールを回していた原田が、突然その手を止めた。やにわに難しい顔でじっとオルゴールを見つめる。

やがて、原田はゆっくりと顔を上げた。

「二人とも、少し時間はあるか？」

「無い」

表情一つ変えずに即答するヒカリを、肘で突つきながら、万里が呆れ顔で口を開いた。

「無い事無いでしょ。今日は四コマ目まで休講だ、って言ってたのに。……で、原田さん、どうしたんですか？」

「ちょっとおかしい事に気がついたんだけど、一緒に来てくれないか」

「あ、はい」

真剣な顔で頷いた万里を尻目に、ヒカリは「じゃ」と挨拶を放って回れ右をした。そのまま一人さっさとこの場から立ち去ろうとするが、間髪入れず繰り出された万里のタックルに阻まれる。

「ちょ、ちょっと、ヒカリ！ ヒカリも一緒に行こうよ！」

「アレに付き合うぐらいなら、オオアリクイと戯れるほうがマシだ」

「オオアリクイでもコアリクイでも何でもいいけど、ヒカリの先輩でしょ。ヒカリがいないと気まずいよー」
万里がひそひそと懇願するも、ヒカリはとりつくしまも無い。

「知らん」

と、頑なな背中に、心底愉快そうな原田の笑い声が投げかけられた。

「自分が気づけなかった事実に、俺が気づいたという事が面白くないんだろ。全く、ケツはでかいくせにケツの穴の小せえ奴だ」

「ケツケツ言うなっ」

ヒカリの怒鳴り声が辺りに響き渡る。

つい振り返ってしまったヒカリの視線の先で、原田が得意げに口の端を上げた。

「ねえ、どうしてそんなに原田さんの事を目の仇にしてるのよ」

原田に先導されての道すがら、万里が不思議そうにヒカリを見やった。五メートルほど前方を歩く話題の人物に、ちらりと視線を投げかけ、ふう、と溜め息をつく。

「ヒカリが言うほど、いい加減な人じゃないと思うけど」

「随分あいつの肩を持つじゃねーか」

「だって、原田さん、私に訊かないんだもん」

「何を？」

不思議そうに眉根を寄せるヒカリに、万里が悪戯っぽい表情で片目をつぶってみせた。

「『彼女、いつもあんな感じにつんけんしてるの？』とか『どうしてあんなに男みたいな喋り方してるの？』とか」

「何だそれ」

反射的に言い返したものの、それらの台詞はヒカリにとって決して珍しいものではなかった。

『ヒカリちゃん、どうしてそんなに乱暴な言葉を使うの？』

怪訝そうな問いかけの言葉。だが、そこに潜んでいるのは「疑問」ではない。おのれの期待にそわぬものに対する、「非難」だ。

『お姉ちゃんと同じように育てたはずなのに、一体誰の影響なのかしら』

「……何だそれ」

再度ぼそりと呟いたヒカリに、万里がにんまりと笑いかけてくる。

「だからさあ、上っ面だけじゃなくて、きちんと中身も見てくれてる、って事じゃん」

朗らかな万里の声に、ヒカリはほんの刹那口を引き結び……それからそっと顔を背けた。

「だから、ムカつくんだよ」

数分後、三人は大学構内の隅にある文化部棟にいた。古ぼけた鉄筋コンクリート造りの一階、薄暗い廊下の突き当たり、原田が所属するという工作部の部室である。

趣味の工作に勤しむ人間ならば来る者を拒まず、という同好の会は、部室の雰囲気もその趣旨を反映して混沌としていた。壁一面を埋め尽くすオープンラックには、大小さまざまな箱が引き出し代わりに並べられており、木材から電子基板、裁縫道具から溶接機まで、雑多な品物が突っ込まれている。

初めてこの部屋を訪れた二人は、ひたすら興味深げに部屋中を見まわした。入口を入れて正面には腰高

窓、左手奥の壁には四十インチはくだらない立派な液晶テレビ。その横の棚に並び、多種多様なゲーム機と週刊マンガ雑誌を見て、ヒカリの目つきが冷ややかなものになる。随分居心地の良さそうな部屋のように、と口元を歪めかけたところで、隅に積まれたシュラフに気づき、ヒカリは思いっきり脱力してしまった。「秘密基地みたい」と目を輝かせた万里の呟きが、とどめを刺したようでもあるが。

原田はそんな彼女達の様子には目もくれず、部屋の真ん中にでんと据えられた大きなテーブルの上にオルゴールを置いた。散らかる書類やらコップやらを大雑把に隅に寄せ、空いた場所にスタンドライトを引っ張ってきて、それからオルゴールの底辺を外すと、何やらごてごてと機器が取り付けられた大きなルーペを、櫛の歯に近づけた。

「やっぱりな」

「何がですか？」

興味津々の万里の後ろから、ヒカリも渋々といった風に顔を覗かせる。

「ちょっと待って」

そう言って原田は、どこからともなく黒いケーブルを一本引き出してきた。ルーペ側面の小さな蓋を開け、コネクタを差し込む。リモコンのスイッチを入れた途端、液晶テレビにルーペを通した映像が大写しになった。

「ここが、破損箇所だ。分かるか？」

原田の手の動きに合わせて、画面一杯に映し出された鋼鉄色が、ゆっくりとスクロールする。

「変だな」

ぼそりとヒカリが呟いた。

先ほどまでとは一転して熱心に身を乗り出すヒカリの様子に、万里が目をしばたたかせる。その横で、原田がほんの一瞬だけ嬉しそうに目を細めた。

「え？ 何が？ 何が変なの？」

「断面が滑らか過ぎる」

「その通り」

やっと気づいたか、と尊大な態度で一言つけ加えてから、原田が慎重にルーペの位置を調節した。

画面の中が大きく揺れたかと思えば、その中央に、一本の水平なラインが映し出された。

「問題の歯だけを一本、こう、上に反らせて、切り取ったんだらうな。薄刃のニッパーを使えば、簡単だ」

なるほど、画面に映るこれは、上と下の両方から固い刃で挟み切られた痕に違いない。

原田の台詞を受け、ヒカリは真剣な眼差しを画面からオルゴールへ落とした。

「つまり、この櫛の歯は、何者かの手によってわざと工具を使って切り取られたと考えていい、という事か」

「そう。ところで松山さん、破片は見つからなかったんだよね？」

いきなり話を振られた万里は、跳ねるように背筋を伸ばした。

「は、はいっ！ それはもう、目を皿にしたつもりで探したけど、見あたらなくて」

「という事は、やはりこの歯を切り取ったのは、その送り主である可能性が高いな……」

「え、でも、サトル兄ちゃんがなんでそんな……」

考え込む原田の横で、ヒカリが眉間に皺を刻む。

「まさか嫌がらせて事は無いだろうが……」

「それか、ある種の挑発行為とか、な。ネタ振り、きっかけ作り、とか」

折れた歯の謎に意識が向いているせいだろうか、とても自然に言葉が二人の間を行き来していた。その様子を、万里があっけにと取られた表情で見つめ続ける。

「お姉さんと、その『サトル兄ちゃん』ってのは、どういう人でどんな関係なんだ？」

再び自分のほうに話の矛先が回ってきた事で、万里は彼らの観察を渋々諦めた。

「姉ちゃんは……私よりも三歳上で、音大に通ってます。専攻はピアノで、結構腕はいいみたい。見た目もそこそこ美人なんだけど、中身が……中身が……」

そこまで語って、万里は突然身震いし始めた。

「……昔、姉妹喧嘩の時に、ブリタニカ投げつけられたし……、この間は、電車で遭遇した痴漢を、独りで捕まえて駅員に引き渡したって……」

ふー、と感心したように息を吐き出してから、原田がニヤリと傍らを見やる。

「……要するに、難方みたいな性格、と」

「冗談！ 私は百科事典を粗末に扱ったりしない」

「ブリタニカじゃなくて！ 私の心配をしてよ！」

話題が逸れた元凶がおのれである事を自覚しているのかいないのか、原田が「まあまあ落ち着いて」と調子の良い態度で万里をなだめた。

「で、そのツワモノなお姉さんに、そのサトル氏がいわくありげなプレゼントをした、と」

「姉ちゃんと同じ年って言ってたっけ」

「そう。高校までずっと同じ学校でねー。落ち着いた感じの、『これぞお兄ちゃん』って風に頼れるカッコイイ兄ちゃんなんだけど、面倒見の良いところにつけ込まれて、姉ちゃんに振りまわされてるって言うか、尻に敷かれてるって言うか、いじめられてるって言うか、虐げられてるって言うか……」

穏やかでない単語の羅列に、ヒカリの眉が思いっきりひそめられた。

「ちょっと待て、『お互い意識し合ってる二人』じゃなかったのか？」

「世の中には色々な愛のカタチがあるんだよ」

と、わざとらしく頷く原田に、ヒカリの容赦無い視線が突き刺さる。

「知った風な事を」

「お子様には解んねーだろうけどなー」

「解ったフリしてボケかます馬鹿に言われたくないね」

「もうっ、サトル兄ちゃんの話、聞くの？ 聞かないの!？」

「あ、すまん」

もしやこれが姉譲り、と思わせる怒声を張り上げる万里に対して、二人は声を揃えて姿勢を正した。

「……で。ついこの間、兄ちゃんが、東京に就職が決まったらしくって。姉ちゃんは、もうこっちでピアノの仕事が決まってるし……、どうなるんだろう、どうするのかな、って思ってたら、それから二人とも全然お互いに顔を合わさなくなって……」

そこで万里は、一際大きな溜め息をついた。

「このまま終わってしまうのかな、って矢先に、プレゼントよ。多分初めての。袋覗いたら、蓋の閉まりきっていない箱が剥き出しなのよ、つい中身見てしまいたくなるよね!？」

「ノーコメント」

またも二人の声が揃った。

その事に気づいたヒカリが原田を睨む。

だが、原田はじっと何か考え込んだきり、周りが目に入っていない様子だ。やがて彼は神妙な顔でオルゴールを手に取ると、もう一度ゆっくりハンドルを回し始めた。

一音欠けたむず痒い旋律が、静かな部屋に流れ出す。

「何の音が折れているんだろうな……」

原田の呟きを受け、万里が少しだけ誇らしげに胸を張った。

「姉ちゃんだったら、すぐに分かるかもだけど」

「もしや、絶対音感ってやつ？」

と、ヒカリが嘆声を漏らす。

「なら、この欠けている音に秘密がありそうだな」

もう少し調べてみるか、と言葉を継ぎ、原田が立ち上がる。ぱあっと表情を明るくする万里の横で、ヒカリが複雑そうな顔で小さく鼻を鳴らした。

「餅は餅屋、ってね」

隣の棟にある軽音楽部の部室の前に立ち、原田は軽く扉をノックした。一拍おいて、「どうぞー」と野太い声が奥から響いてくる。

「篠原、いるかー？」

おう、という返事を待たずに、原田が扉を開いた。正面の窓際に立っていた男が、にこやかに片手を上げる。

「原田！ この間はありがとうな。お陰でほら、」そう言って彼は傍らのキーボードに手を伸ばし、ドレミファソ、と音階を奏でた。「この通り、もうすっかり元通りだ。本当助かったよ」

ありがとう、助かった、と何度も繰り返す声に、原田が照れたように頭を掻く。左手奥の机に座っていたもう一人が、感心したように口を開いた。

「もしかして、修理してくれたっていう工作部の人？ 凄いなあ。僕のベースが壊れた時も、頼めるかな」

「部品があればね。依頼は会計通してな」

背後で感嘆の溜め息を漏らす万里に、得意げな目配せを投げてから、原田は部屋の中へと歩みを進めた。

「篠原、お前さ、『ふるさと』って弾ける？ 『うさぎ追いしー』ってやつ」

「ああ」

篠原と呼ばれた男は、ちょっぴり得意そうにキーボードに指を走らせた。幾つか音をさまよったのち、訥訥と旋律を弾き始める。

「うさぎ美味しいー」

良く通る低い声で字余りの歌を歌う篠原に、原田は、「いきなり喰うか」とツッコミを入れてから、ニヤリと後ろを振り返った。

どこもかしこも馬鹿ばかりかよ、とヒカリが即座に目線で返す。

ド ド ド レーミレ、ミ ミ ファ ソー

ファ ソ ラ ミーファミ、レ レ シ ドー……

「シ、か……」

弾き手の手元を見つめながら、原田が唸った。オルゴールに欠けていた箇所は「シ」の音だったのだ。

「『ロ』とも言うよね。ハニホヘトイロ、で『ロ』」

「ツェー、デー、エー、エフときて『ハー』かもな」

本題に入ったからには遠慮は無用、とばかりにキーボードの周りに押し寄せてきたヒカリ達を見て、篠原が目を丸くした。誰？ と慌てる彼に、原田が苦笑を浮かべる。

「ちょっとこの子らの調べ物を手伝っててさ」

「へー。君らもしかして一回生？ 何学部？」

律儀に「経済です」と返事をする万里を放っておいて、ヒカリは原田に向き直った。それから、尊大な態度で腕組みをし、皮肉ありげに口元を歪ませる。

「さて、迷探偵殿は、これらをどう料理するんだ？」

「急かすなよ。お前、ケツの穴が小さいだけじゃなくて、早ろ……」

「シモネタはもう充分だ」

光の速さで、ヒカリの肘が原田の鳩尾に入った。腹を抱えて呻く背中にとどめを刺すべく、ヒカリは刺々しい声を投げつける。

「欠けている音が判明したわけだが、これで謎が解けるのか？」

「お前は？ 何か思いつかねーのか？」

質問に質問で返す不躰さに、ヒカリの眉が大きく跳ね上がった。

「これはアンタが言い出したネタだ」

「じゃあ、お前に何か他のアイデアがあるのか？」

いつになく静かな眼差しで問いかけられて、さしものヒカリも言葉に詰まってしまった。

「代替案があるってんならともかく、他に良い案も無いのに、偉そうに突っかかってくるってのは、どうよ？」

「……それを言うなら、アンタだって充分偉そうな態度じゃないか」

目元に力を込めて、ヒカリが原田を睨みつける。だが、当の原田は全く怯んだ様子も無く、そればかりか、にい、っと口元に笑みを浮かべた。

「な、何だ」

「『アレ』呼ばわりから『アンタ』になったな」

しまった、とヒカリの目が見開かれた。

「って事は、俺、妖怪から人間に昇格したんだな？」

そう言って楽しそうに笑う原田の、どこを何で殴りつけてやろうか、とヒカリが考えを巡らせていると、突然オルゴールが鳴り始めた。

何事かと振り返れば、篠原の横で万里が、「ここが一言欠けているんですよー」とか何とか言いながらオルゴールを回していた。

「あれ？ ……違うな」

ぼそり、とこぼされた篠原の声に、ヒカリも原田も一変して真顔になって、彼の傍に駆け寄った。

二人が全く同じタイミングで「何が」と問う様子に、万里の眉がそっと緩む。

「何が違うんだ？」

「音がね。ほら」

篠原の指が、先ほどと同じ鍵盤の上を滑る。オルゴールの曲に追いついたところで、彼の言わんとする事をその場の全員が理解した。

オルゴールの音とキーボードの音が合っていない。

合奏を諦めて、篠原は同じ高さの音を探し始めた。キーボードの上で指を行ったり来たりさせる事数秒、やがてオルゴールの音と楽器の音とが綺麗に重なった。先ほどの不協和音とは打って変わって、見事な二重奏が部屋の空気を震わせる。

旋律が一巡したところで、どちらからともなく演奏は終わりを迎えた。

「へー、ト長調かあ」

篠原の呟きに、原田が身を乗り出した。

「どういう事だ？」

「さっき俺が弾いた時には、黒鍵は使わなかつただろ。俺は絶対音感なんて上等なもの持ってないからさ、音と音の音階の差だけ拾って、単純に八長調でメロディを探したんだ。でも、本当はファにシャープのついたト長調だったんだ」

ソラシドレミファソ、と篠原が黒鍵を交えて弾いたその音は、何も知らない素人の耳には、まるで「ドレミファソラシド」のように聞こえる。

と、その時、奥にいたもう一人の軽音楽部員が口を開いた。

「楽譜では、へ長調になっているけどね」

「マジ？」

篠原が机の傍へと向かう。ベース担当と言っていた部員は、手に持った大判の冊子を開いてみせた。

「そのキーボードの付録の楽譜に、載ってるんだよ、『ふるさと』が。ほら」

「本当だ、へ長調だ」

遅れて駆け寄る一同が、篠原の肩越しに楽譜を覗き込んだ。

ふるさと、とタイトルを冠した五線譜には、フラットが一つだけ、ちょこんと飾りのようについている。

「童謡とか唱歌とかって、へ長調が多いと思ってたから、ト長調って聞いて意外に思って」

「でも、へからトだと、わざわざ変調するメリットってあまり無いよな？」

へはファ、トはソの音名だ。ファを主音とした長調がへ長調で、ソを主音としたのがト長調である。

「相当音域の限られている楽器なら別だけど、オルゴールだしなあ」

「ギターみたいにコードとかも関係無いもんなあ」

ぶつぶつ呟くアマチュア演奏家二人の間に、原田が少しだけ遠慮がちに身を割り込ませた。万里から受け取ったオルゴールを示しながら、おずおずと問いかける。

「ト長調という事なら、結局欠けているのはどの音なんだ？」

「ファ、だな」

「シャープがついている音か……」

もう一度オルゴールと同じ音で弾いてみてくれないか、との原田の言葉に、篠原は気前良く頷くと、キーボードの前に立った。

ソ ソ ソ ラーシラ、シ シ ド レー
ド レ ミ シードシー、ラ ラ ファ ソー……

「じゃあ、今度はシャープを取っ払ってみてくれ」

「いいけど」

ファ、のところで白鍵を押さえた途端、弾いている本人も含めた全員の眉間に皺が寄った。

「わ、変なの」

「たかが半音で、気色悪くなるものだな」

顔をしかめてぼやくヒカリ達に、軽音楽部員が苦笑を返す。その横で、原田がただ一人、無言のままじっと立ち尽くしていた。彫像のごとく微動だにせず、難しい顔でおのれの足元を見つめている。

やがて彼は勢い良く顔を上げると、「サンキュ」とだけ言い残して、そのまま部屋を飛び出していった。

礼もそこそこに軽音楽部室を辞したヒカリ達が、工作部の部屋に戻ってみれば、原田がドライバー片手にオルゴールに挑みかかろうとしているところだった。

「わー！ 原田さん、何するんですかっ！」

「壊すなー！」

ヒカりは右手、万里は左手、と見事な連係プレーで二人は原田を押さえにかかった。期せずして両手に花となった原田が、ちょっと赤い顔で叫ぶ。

「壊すか馬鹿！」

「じゃあ、なんでドライバーなんか持ってるんですか！」

間違いなく姉譲りの万里の恫喝に若干怯えつつ、原田はそろそろオルゴールを指差した。

「この櫛を外してみようかと思って」

「何故そんな事をする」

無然としたヒカりに得意そうな笑みを投げてから、原田はルーペを手に取った。さっきとは違って、今度は櫛のネジのあたりを拡大して見せる。

「……これは……」

「台座の酸化した部分と、櫛の端っこと、ほんの僅かだがズレてるだろ。さっき見た時は、気のせいかなと思ってたんだが」と、そこで原田はもったいぶるように言葉を切った。「多分、この櫛は『違う』んだ」

「違う？」

「元々このオルゴールについていた櫛とは違うものに、取り替えられているんだろう」

原田は再びドライバーをネジに当てた。

「取り替えられた櫛は、恐らく八長調。『ファ』の音に、シャープはついていなかったんだ」

原田の言葉を聞き、ヒカリの背筋が、ぴん、と伸びた。

「そうか、だからわざわざ『ファ』の歯を切り取ったんだ」

「そう。そのままだと櫛が違っている事がすぐにばれてしまうからな。音の違う一本を折っておけば、単に壊れているとしか思われずにすむ」

「え、でも、どうして兄ちゃんてばそんな事を……」

きょとんとする万里に、ヒカ리가口角を上げた。

「兄ちゃん、とやらは、たった一人にだけ、知らせたかったんだよ。櫛が壊れているんじゃなくて、櫛が違っているんだ、って事を」

「絶対音感を持つ、たった一人にな」

ころん、とネジがテーブルに落ち、櫛が外れる。

三人は一樣に小さく声を上げた。

櫛に隠されていた台座の部分に、何かが刻まれていた。目打ちか何か針のようなもので彫られた、五ミリにも満たない小さな文字が三つ、スタンドライトの光にきらきらと浮かび上がる。

それは、たった三文字のメッセージだった。思いの丈を込めて刻みつけられた、たった一言のメッセージ……。

三人は、しばし無言でそれを見つめ続けた。

「……何と云うか、あれだな、他人宛のラブレターを間違えて読んでしまった気分だな」

「まさしく、その通りだろーが」

律儀にツッコミを入れつつも、ヒカリもすっかり疲れきった表情で天を仰ぐ。その横で万里が頭を抱え込んだ。

「兄ちゃん……回りくど過ぎるよ……」

我に返った原田が、いそいそと櫛を再びネジどめする。

オルゴールを箱に戻し、紙袋に入れ、それから三人は同時に大きく溜め息をついた。

「ねえ、姉ちゃんがこのメッセージに気づかなかっただろう……」

次の講義に出るべく文化部棟を出たところで、万里が不安そうな言葉を漏らした。

うむ、と唸るヒカリとは対照的に、原田の声はやけに素っ気無かった。

「その男が自分で選んだ修羅の道なんだから、松山さんが気にする事は無いさ」

「思いっきり他人事だと思ってるだろ」

「あたりまえだろ？」と、底意地の悪い笑みを浮かべる眼差しが、ふと、遠くなる。「幸せは自力で掴むもんだからな」

「そんなー！ ね、ヒカリ、どうしたらいい？ このままじゃ私、気になって夜も眠れないよ！」

うむ、と再びヒカリは考え込んだ。

……とはいえ、原田の言う事も確かに一理ある。送り主は熟考の末に、運試しをする覚悟を決めたのだろう。それを第三者がどうこうするのは、いかななものか。

結局他人事って事か。ヒカリはそっと息を吐いた。

いつも、いつも、肝心なところでこの男には敵わない。普段、あんなにちゃらんぼらん事を言っているくせに、こういう時だけは正論を吐くのだから。

だから、ムカツくんだよ。

もう一度、ヒカリは深く息をついた。そうして、ほんの束の間、そっと目をつむる。

それから彼女は、原田には見えないように万里に微笑んでみせた。

「大丈夫だよ。万里の姉ちゃんならきっと気づくさ。音の無い音に」

「無音の音、ね。禅問答みたいだな」

原田が、顎をさすりながらしみじみと頷く。

と、突然、万里が何か思いついたように「あっ」と手を打った。

「そっかー。もし気づかなかったとしても、『よくも不良品を掴ませてくれたね！』って兄ちゃんを締め上げて、本当の事を聞きだすよね、姉ちゃんなら」

あまりにあんまりな言いざまに、ヒカリは思わず足を止めた。

なーんだ心配して損したー、と満面の笑みを浮かべる万里をまじまじと見つめるうち、ヒカリの喉から、知らず「怖えー」と声が漏れる。

それと全く同じタイミング、同じ調子で発せられた同じ言葉に気づいて、ヒカリは思いっきり顔をしかめた。

「真似するな」

「そっちこそ」

対峙する、仏頂面とにやけ顔。

その傍らで、いきなり万里が盛大に吹き出した。息をするのも苦しい様子で、身体を二つに折って笑い転げている。

「ま、松山さん？」

「や、だって、もう、だって……」

「どうした、万里」

「……だって、さっきから、ふたりってば、息、ぴったりで……」

「冗談じゃない！」

待ってよヒカリ置いていかないでー、と縋る声を振り払いながら、ヒカリは、一人早足でその場をあとにしたのだった。

了

文：GB（ジービー / GreenBeetle 改め）

<http://greenbeetle.xii.jp/>

ファンタジーや謎解き、恋愛など、その時々のお話のままに書いています。タネや仕掛けのある物語が大好きです。

絵：yanagi（やなぎ） - イラスト特別提供 -

GB さまのお話のファンで、長いこと只の一読者でございました。yanagi と申します。

本業はグラフィックデザイナーで、趣味で絵描きは致しますが、イラストは久々です。

少しでも作品の世界観のイメージを表現できたらよいのですが...

舞姫夢幻 ～サユザと共に～

冬木洋子

illustration あから

異世界幻想旅行記

旅の楽師に不思議な老婆が語る。
草原に埋もれた歴史。
古の都の最後。
若き王と美しき舞姫の悲話



スナドリ

砂鳥に乗って街道をゆくうちに、いつのまにか道に迷っていたらしい。

旅人は途方に暮れてあたりを見渡した。

丈の低い草が痩せ地にへばりつくように生えているだけの乾いた草原を突っ切る、一筋の古街道。これまでも何度か往来したことがある見知った道筋の、このあたりは迷いようもない一本道であったはずなのに、行けども行けども、今日中に辿りつくはずだった次の宿場が見えてこないのだ。気がつくや、足下の街道自体が、人の踏み跡も絶えて久しい風情で黄褐色の砂を被り、草に埋もれかけている。

そういえば先頃から、普段なら何組も行き会うはずの他の旅人と、一度も出会っていない。やはり気づかぬうちに古い枝道にでも迷い込んでしまったのだろうか。いや、そんな道はないはずなのだが……。胸の裡でひとりごち、旅人は暮れかけた空を仰いだ。

西方の砂漠に産する巨砂鳥は、早駆け時の上下の振動が激しいので騎乗に熟練を要するが、どんな悪路もものともせず、穏和で頑健、渴きに強く雑食性で、休憩時に放してやれば草でも地中の小虫でも、ときには蛇や蛙や野鼠まで何でも勝手に食べるので飼葉もほとんど不要、野宿の際には巨大な翼を天幕代わりに柔らかな羽毛に包まれて眠れば夜露も凌げて暖かく、人に倍するその巨体と鋭い嘴に恐れをなして野の獣も滅多なことでは近寄らないという、荒野の旅にはこの上もなく役立つ騎獣だ。そのうえ賢く忠実で、細やかな愛情と愛嬌のあるしぐさで旅の孤独を癒やしてくれる、良き道連れでもある。

が、夜目が利かないのだけは、鳥であるからにはしかたがない。

野営をするのはいいとしても乏しくなってきた水だけはなんとか調達できぬものかと思案していると、行く手に何か見えてきた。

近づいてみると、なんと都合の良いことに、それは古びた井戸だった。見渡す限り遮るものもない広い草原の只中に、ぼつんとひとつ、井戸がある。傍らには一人の老婆が、頭からすっぽりと布を被って、蹲るように座っていた。

砂鳥から降りて年長者への礼を取りながら進み出ると、老婆は皺深い面を上げ、旅人を差し招いた。間近に寄って見下ろせば、老婆の被っている布は、古びて色褪せ擦り切れてはいるがずっしりと凝った織り目の、金糸銀糸を精緻に織り込んだ豪華な衣の成れの果てであると知れた。

老婆は井戸守りと名乗り、井戸から水を汲んで、まず自分で一口飲んでみせてから、柄杓を差し出してきた。なぜこんなひとけのないところに老婆が一人で、と、不思議に思いながらも、有り難く澄んだ水を飲み干し、勧めに従って皮袋にも満たした。砂鳥も、足元に置かれた水桶に幾度も頭を突っ込んで、雫が伝う長い頸を一飲みごとに反らしては、満足げに咽を鳴らした。砂鳥は水を飲まないというのは単なる俗説だ。生草などの水分のある餌を摂っていれば長期間水なしでも耐えられるというだけで、新鮮な水があれば喜んで飲む。

謝礼の小銭を差し出そうとすると、老婆は受け取らず、旅人が背負った半月琴に目をとめて、謝礼代わりに音楽と一夜の話し相手をと所望した。

まもなく日も暮れる。この先にはどうせ何もないから、ここで夜を明かすと良い。屋根はないが焚き火を振る舞おう。あそこに積んである薪を運んできて火を熾しておくれ、と。

この老婆は何処に住んでいるのだろうか。まさか普段からここで一人で夜を明かしているのだろうか。水はともかく食料はどうしているのだろうか……。訝しみながらも旅人は、言われるままに火を熾し、焚き火のほとりで携帯食を食べ、老婆にも勧めたが、老婆は手を振って断った。その背後に、火明かりが作るはずの影がないのに、そのとき初めて気がついた。

いずれ人外のものであろうとは薄々察していたから、意外には思わなかった。

それでも旅人は、老婆に琴を奏でて聴かせた。

旅人は楽師でもあった。よしや妖しの者であっても、楽の音を愛するものがもてなしの対価として演奏を望むのに、応えないのは楽師の名折れだ。それに、たとい魔物であれ亡霊であれ、楽を愛する者であれば、楽の奏で手に危害を加えはしないものだ。その演奏が、その者の心に適いさえすれば。

旅人は己の楽の音にいささかの自負を持っていた。演奏の技量にではなく、音色にこめることができる音楽への純粋な愛に対して。

心をこめた演奏を老婆は気に入り、返礼にこの場所にまつわる物語を、と申し出た。

この場所を、よく見てごらん。という老婆の言葉に、あらためて黄昏の草原を見回すと、周囲には風化した石材の破片が散乱し、目を凝らせば、井戸を取り囲むように、城郭の跡と思しき草むした遺構もところどころ見分けられるのだった。

老婆は、かつての光景の幻を見ているかのように夕闇に沈みかけた街道の先を見遙かし、低く語りはじめた。

「遠い昔、この道の向こうから、騎馬の軍勢がやってきたのだよ。」

かつて、ここには、城壁に囲まれた小さな都があった。小さいけれど文化の栄えた古い都で、古い血を引く王もいた。年若い王で、未だ正妃を持たず、ただ一人の愛妾を一途に慈しんでいた。妾姫は名立たる舞姫で、その美貌と舞の上手の評判は、草原の西の果てから東の果てまで隈なく鳴り響くほどだった。王と妾姫は幸せだったが、雅な文化を誇る古い王国は既に昔日の勢いを失い、熟れすぎた果実が自ら地に落ちようとするように、すっかり力衰えて緩慢な滅びの中にあっただ。

そんな頃、草原の北に台頭してきた蛮族が、この道を通って都に攻め寄せてきたのだ。

迎え撃つすべも持たぬ文弱の王は、民を城壁の外に逃がして後に城門を閉ざした。

涙ながらに都を捨てた人々のどれほどがどこかで生き延びることができたのかは知らない。

城門を閉ざした都は、騎馬の蛮族に包囲された。城壁の中には、王と家臣たち、そして、都と運命を共にすることを選び取った一部の民たちが残った。城壁を乗り越え、打ち壊して蛮族が攻め込んでくるのは時間の問題と思われた。

そんな中、蛮族の首領は、城壁越しに舞姫に呼びかけてきた。明日の朝までに自ら出てきて自分のものになれば命は助けてやろう、と。王たちにも、止め立てせずに舞姫を通せば都の陥落の後に多少の情けはかけてやろう、と。

陥落後の情けなどという約束が嘘であるのは明らかだったし、情けをかけられたいとも思わなかったが、舞姫の命を取らないという約束は本当だろうと思われた。舞姫はその絶世の美貌を草原中に謳われていたから、蛮族の首領がまだ見ぬその美姫を一目見たいという好奇心に駆られ、さらには己がものにしてみたいという好色な野心と執心を抱いても、何ら不思議はない。

王は、我が身を断ち切る思いで、己が愛妾にこの呼びかけに応じることを勧めた。が、舞姫は、王と共に、都と共に滅びることを自ら選んだ。

諸共の死を覚悟した王は、その夜、蛮族たちの包囲の中で、この都の最後の舞の宴を催したのだった。

煌びやかに着飾った王に家臣、やはりできうる限りの盛装に身を包んだ民たちの全員が、赫々と篝火を焚いた王城の中庭に集った。残り少ない備蓄食糧の洗いざらいが宮廷料理人の矜持にかけて山海の珍味であるかのごとく技巧を凝らして調理され、洗練の限りを尽くした器に美しく盛られ、酒蔵の美酒も一甕残らず運び出されて、身分の分け隔てなく供された。料理の量は少なかったが、折りしも盛りの甘扁桃の花びらの舞う中庭にしつらえられた宴席は、まるで栄華の盛りの優雅な花遊びの夜宴のよう。夜風に白い花びらが流れ、金の火の粉が夜空を焦がして舞い上がる中、篝火に照らされて、舞姫は舞った。滅び行く故国のために、愛した王のために。そして最後に舞台を降りて、中庭の真ん中の深い井戸にその身を投げた。死した後にさえ己が身に、蛮族の手が指一本たりと触れぬよう。それを見届けた王と家臣たちは、みな、その場で刺し違えて息絶えた。

「翌朝攻め入ってきた蛮族たちはどうなったかって？ 全部死んだよ。一人残らずね。何故なら、井戸に身を投げた妾は、舞衣の懷に毒を抱いていたのだから。色も匂いも味もなく、水に良く溶ける強い毒をね。しかも、飲んですぐ効く毒じゃあない。最初に飲んだものがその場で死んだら、他のものたちは水を飲まぬもの。一刻ほどたってから、ゆっくりと効く毒であったのさ。 ああ、そんなぎょっとした顔をおしでない。たしかにこの井戸がそうじゃが、あれはもう、遠い、遠い、昔の話じゃもの、毒など、とっくに消えたよ。折り重なった屍も、都の跡さえ砂に埋もれ、草に埋もれて消え果てる それくらい、長い、長い時がたったのじゃよ。……そうではない？ んごっとしたのは毒が怖かったからではなく、妾がその舞姫であったからと？ 妾が常の人ではないことなど、そなたはとうに察しておったろうに。だからこそ、こうして昔語りをしたのじゃに。……そうでもなく、絶世の美女であったはずの舞姫がこのような老婆であることに衝撃を受けたと？ ……失礼な」

そう言いながら、老婆の口調は笑いを含んでいた。

あたりには、いつしか深い闇が落ちていた。

「堅固な石造りの城でさえ崩れ果てて砂に還り、跡形もなく草に埋もれるほどの長い長い年月のうちには、いかなる美女も老婆になろうというもの。じゃが、話を聞いてくれた礼に、昔日の美女の舞姿を見せてやる。さあ、楽を奏でておくれ……」

そう言って老婆が、被っていた衣をすりと肩に落とし、袖を通しながら立ち上がると、曲がっていた背がすっと伸びて、そこには金系銀系の舞衣を纏った、鵝長けた美女。

しなやかな指先が中空に軌跡を描いて天に伸べられ、ゆるやかに舞が始まった。幾重にも重ねられてきらめく玉飾りがしゃらしゃらと鳴り、滑るような足取りを追って華麗な裳裾がさんざめく。ふいに身を翻せば五色の絹布が宙を流れ、螺鈿の髪挿しが火影に映える。

はじめはゆったりと、しだいに早く激しく、舞姫は舞った。

舞は語った。過ぎし日の愛を、誇りを、恨みを、憎しみを、哀しみを。

いつしか、金砂のように闇を彩る火の粉に混ざって、白い花びらが降っていた。

旅人は夢を見ている心地で、降り惑う花びらと耀う火の粉に彩られた幽遠の舞を眺めていた。

本当に夢を見ていたのかもしれない。旅人はいつのまにか演奏の手を止めていたのに、楽の音は続いていて、小さな焚き火は赤々と燃え盛る篝火に変わり、立ち並ぶ篝火の向こうには、装いも美々しい若き王と居流れる廷臣たちのおぼろな影が、^{ほむら} 焔の揺らめきにつれてつかのま浮かびあがっては、儂く闇に沈むのだった。楽の音に混じって、遠く人馬のざわめきも流れてくる。

陶然のあまり、しだいに夢も現も判らぬようになり、目を開けて舞を見ていると思っているうちにいつのまにか目を閉じて、ただ夢寐のうちに舞の続きをみつめつづけていたのだろうか。夢の中で、舞い終えた美女が、眠る自分の上に身を屈めて手を取り、髪から引き抜いた螺鈿の髪挿しをそっと握らせる場面を見たような気もする。

夢の中の美姫は囁いた。良い伴奏であった。おかげで心置きなく舞うことができた。消え残っていた想いの全てを舞い尽くすことができた。伴奏と、話を聞いてくれたことの礼に、これを進ぜよう。そなたが自分で持っていてもいいし、人にやっても、売ってしまってもかまわない。ただ、そなたは、妾のことを、そして滅びた都のことを、憶えていておくれ。忘れずにいて、語り伝えておくれ。そしてこの髪挿しを人に譲るときには、必ずや、その相手に、妾と都の話語り、髪挿しと共にこの物語を語り伝えてゆくように頼んでおくれ。さすれば妾は安んじて、ここを離れることができる。天へと続く道の途中で妾を待っていてくれる愛しい王の元に、旅立つことができる。旅人よ、伝えておくれ、滅びし都の、名は^{マユラ} 繭羅。

はっと気がつく、旅人は、心安らぐ鳥の体臭と柔らかな羽毛で満たされた心地よい薄暗がり目覚めたところだった。砂鳥の翼の下で、その羽毛と体温に包まれて寝入っていたのだ。旅人の手の中には、古びてはいるが見事な細工の螺鈿の髪挿しがあった。

目覚めた合図にそっと砂鳥の胸を叩くと、砂鳥は頭上から翼をどけて静かに立ち上がり、長い頸を下げて頭を擦り寄せてきた。旅人が頼れる相棒への感謝をこめて頸の下を搔いてやると、愛鳥は心地よさげに目を細めて、咽の奥でクゥ、と啼いた。

あたりは朝で、老婆の姿はなく、ただ崩れかけた古い枯れ井戸があるだけだったが、水袋にはちゃんと、昨晚井戸から汲んだ澄んだ水がいっぱいに入っていて、朝日を受けて砂鳥と共に出立すれば、街道はいつのまにか見慣れた佇まいに戻り、ほんの数歩も歩いて振り返ると、そこにはもう、古井戸の影も形も見えなかったのだった。

「そして、これが、その髪挿しだ。どうだい？ 砂に埋もれた古い都の、王の寵姫の髪飾りだよ」

賑わう市の片隅で、旅の楽師兼物売りは、砂鳥に括りつけた袋から取り出した髪挿しを恭しく掲げて見せた。そうしながら、遠巻きに群がる子供たちに声をかけるのも忘れない。

「ああ、ぼうやたち、砂鳥は大きい優しい生き物だから、怖がることはない。ほら、可愛い眸をしてるだ

る？ 名前はサヌザと言うんだ。触ってみるかい？ 頸を撫でてやると喜ぶよ。ただし、気をお付け、もしも、お母ちゃんへのお土産に羽を一本、なんて悪戯心を起こして引っこ抜こうとでもしたら、この大きな嘴で、頭からばくっと齧られてしまうよ」

騎乗用の砂鳥は東方では珍しいから、こんな田舎の市では、傍らに立たせておくだけで恰好の客寄せになる。

楽師は人垣の中から、赤い頬をつやつやさせた頑丈そうな女に目をとめて差し招いた。

「ねえ、そこの美しい奥方。そう、あなただよ。この髪挿しを買わないかい？ あなたのよう美しいご婦人になら、きっと似合うと思うから、安くしとくよ。儲けより、似合う人に挿してもらうのが一番だからね。ああ？ そんな、井戸に身を投げた悲運の姫の髪挿しなんて、呪われているのじゃないかって？ 祟るんじゃないかって？ まさか。とんでもない。あれはたしかに亡霊の類ではあったと思うが、悪いモノじゃあなかったよ。ただ、自分たちのことを誰かに憶えていて欲しかっただけなんだ。自分たちのことを語り伝えてくれる人が欲しかったんだ。だったら、そうしてくれる相手に害を成すわけがないだろう。古き繭羅とその舞姫の物語を語り伝えてゆく限り、髪挿しを持っているものは、むしろその伝え手として守護してもらえるはずさ。奥さんに、娘はいるかい？ じゃあ、その娘さんが嫁に行くときに、この髪挿しを、由来を話して持たせておやりよ。そうして、娘さんは、そのまた娘さんに、物語と共に髪挿しを伝える。そうすれば、繭羅の舞姫は深く満足して、この髪挿しは、あなたとその娘、そのまた娘を代々守ってくれるだろう。……しかも、この髪挿し」と、物売りはここで、秘密めかして声を潜める振りをした 実際には声色が変わっただけで、声は小さくなっていなかったが。

「ここだけの話、あの舞姫が、石造りの城が砂に還るほど長いこと絶世の美貌を保っていたのは、これのせいじゃないかと思うんだ。だって、舞姫が私に渡そうと髪挿しを抜いたとたん、みるみる縮んで、萎びた老婆の姿に戻り、ふっと消えてしまったんだからね。実はこの髪挿しにこそ、若さと美貌を保つ不思議な力があつたんじゃないか？ もしかすると、生前の舞姫の美貌も、多少はこの髪挿しのおかげだったのかも……？ ねえ、あなたのその健やかな美しさが、これ一本で^い増した上にいつまでも保たれるとしたら、私はとても嬉しいんだけどな……」

「そう言って、物売りは、招きよせたあたしの手^に髪挿しを載せて、あたしをじっとみつめながら優しげに笑ってね、その手を両手でそっと包みこんだんだ。それがまあ、うっとりするようないい男だったんだよ……。金の髪に翠の目の、珍しい西域の美貌でさ。煙るような金色の睫毛の長いことといたら！」

たまさか訪れた下界の市で髪挿しを購った高地の村の女は、そう言って、井戸端に集った女たちに髪挿しを見せびらかすのだった。

衣を濯ぎながら笑いさざめく賑やかな女たちの頭上には、純白の雪を頂く峻嶺が厳しくも清らかに聳え、光明るい高嶺の空を清澄な風が吹き渡る。

「その物売りの綺麗な顔とお世辞につられて、ふらっと買っちゃったわけかい？ 挿してるだけで美人になれる髪挿しなんて、そんな莫迦げた話があるもんかね！」

どっと笑われて、女は頬を膨らます。

「別にそんなのは嘘だっていいんだよ！　だって、ほら、見事な細工じゃないか。物売りの話が嘘でも本当でも、値打ち物には間違いはないよ。それに、あの綺麗な西域の物売りが、あたしのことをじっとみつめて、美しい奥方って言ってくれたんだよ。嘘でも嬉しいじゃないか。これを見るたびに、そのことを思い出して楽しくなれるじゃないか」

「でもさ、そんなものに大枚はたいて、あんたの亭主がなんて言うかね」

「ふん！　亭主になんか何も言わせやしないよ！　だってこれは、あたしが山に入って採ってきた薬草をあたしが自分で市に降りて売った金で買ったんだからね。あたしが稼いだ金で何を買おうと、あたしの勝手さ！　ねええ、ラサ、あんたが嫁入りするときには、この髪挿しをあげるからね。古い繭羅の都の、王の寵姫のご加護がある、特別の髪挿しなんだよ」

女たちの足元で遊んでいた泥に汚れた裸足の小娘は、突然名を呼ばれ、きょとんと指を咥えて母親を見上げる。

幼子の手を引き堂々たる尻を揺らして立ち去る健やかな女の髪で、螺鈿の髪挿しはからりと明るい山の陽にきらめき、空はどこまでも澄み渡って白い稜線を抱くのだった。

その頃、同じ空の下、純白の峰々に見下ろされて街道をゆく旅人は、翼持つ相棒の頸の付け根を優しく叩いて呟いていた。

「ねえ、サヌザ、あのひとは、いまごろ髪挿しを挿してくれているだろうか。サヌザ、お前にわかるかな。もしもあのひとが私の頼み通り、髪挿しとともに古き繭羅の物語を本当に語り伝えてくれるなら、その時、髪挿しは本物なのだよ」

旅人は夢見るように微笑んで、高地の女の面影を胸に、背後の山並みを振り返る。

砂鳥は小首をかしげて賢しげな眸を瞬かせ、訳知り顔でクゥ、と啼いた。

「サヌザ、わかってくれるのかい？」

「クゥ」

「そうか、わかってくれるのか」

「クゥ」

「綺麗な女だったね。美人ではないが、私はあのひとを綺麗だと思ったよ」

「クゥーウ」

サヌザは幾度でも機嫌よく主人の声に応えながら、長い脚を悠然と繰り出して歩を進める。

こうして旅の楽師兼物売りは、今日も愛鳥サヌザと共に、草原の道を、いずこへともなく旅しているのであった。

文：冬木洋子（ふゆき・ようこ）

<http://www.geocities.jp/canopustusin/>

異世界ファンタジーがメイン・ジャンル、恋愛がサブ・ジャンルという感じで、たまに他のものも書きます。無駄にトシくってるのがウリです。

絵：あから

<http://www16.ocn.ne.jp/~ukatsu/gauss/index.html>

あからと申します。

未熟な絵師ですが、参加させていただきありがとうございました。

あとがき

オリジナル短編小説誌「でんしょでしょ！」2号をお届けいたします。

創刊号と共に、ネット小説ファンの皆さま、および、読書好きな皆さまに、お楽しみいただけると嬉しいです。

本誌作成にあたって、作者さま、絵師さま、そして、校正担当のメンバーのみなさまには大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。
本当にありがとうございました。

これから3号の参加者募集も始まりますので、興味を抱かれたかたはぜひ下記サイトの方をご覧ください。

『でんしょでしょ！ 企画室』

<http://densyo.sblo.jp/>

2011年7月吉日 なび

【オリジナル小説誌】
でんしょでしょ！ vol.2
<http://p.booklog.jp/book/31047>

定価 無料

でんしょでしょ！ 作成企画室 (<http://densyo.sblo.jp/>)

作成責任者：なび (<http://wanavi.squares.net/>)

校正担当者：なび・冬木洋子・村崎右近 / damo (臨時手伝い)

表紙イラスト：女将

初版：2011年7月

二版：2012年8月

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/31047>

ブックログのpapier本棚へ入れる
<http://booklog.jp/puboo/book/31047>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.